

2023 年 6 月

食料安全保障月報

(第 24 号)



令和 5 年 6 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 6 月食料安全保障月報（第 24 号）

目 次

概要編

I	2023 年 6 月の主な動き	1
II	2023 年 6 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「最近の異常気象と世界の穀物生産への影響」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

今月のコラム

「シンガポールの食料事情②：食文化と消費嗜好」

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2023/24 年度の生産量は前年度から 0.9%増加の 45.3 百万トン
	＜カナダ＞	2023/24 年度の生産量は前年度に比べ 5.7%増の 35.8 百万トン
	＜豪州＞	2023/24 年度の生産量は前年度比 25.6%減の 29.0 百万トン
	＜EU27＞	ウクライナ産小麦の輸入規制は 9 月 15 日までに段階的に廃止
	＜中国＞	2023/24 年度の輸入量は、豪雨の影響から 1.5 百万トン上方修正
	＜ロシア＞	2023/24 年度の輸出量は史上最高の 46.5 百万トンとなる見込み
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の輸出量は 10.5 百万トンと前年度比 34.4%減少の見込み
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	中西部の乾燥の影響で、作柄評価は前年同時期を下回る
	＜ブラジル＞	2022/23 年度の冬とうもろこしの収穫に遅れ
	＜アルゼンチン＞	2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し
	＜中国＞	2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高、輸入量増加の見通し
	＜ウクライナ＞	ロシアの侵攻により、2023/24 年度の生産量は前年度比 9.3%減
3	コメ	1 5
	＜米国＞	2023/24 年度の作付けは終了。生産量は回復見込み

＜インド＞	2023/24 年度のモンスーンは1週間遅れて6月8日から開始
＜中国＞	一期作稲、及び南部の二期早稲の生育は順調
＜タイ＞	雨季米の作付け開始。作付面積、単収いずれも減少見込み
＜ベトナム＞	冬春作は収穫期で単収は増加見込み。夏秋作の作付け開始

II 油糧種子

大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
＜米国＞	中西部の乾燥の影響で、作柄評価は前年同時期を下回る
＜ブラジル＞	2022/23 年度の収穫はほぼ完了し、生産量は史上最高の見通し
＜アルゼンチン＞	2022/23 年度の輸入量は、減産により史上最高の見通し
＜中国＞	2023/24 年度の実産量・消費量は史上最高、輸入量増加の見通し
＜カナダ＞	主産地のオンタリオ州での播種は終盤

(参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2023/24 年度)・・・	27
(参考2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	27
(参考3) 各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)・・・・・・・・	28

【利用上の注意】

表紙写真：米国・イリノイ州の大豆圃場（5月31日撮影）
 除草剤の噴霧作業を行っている。5月末時点の生育状況は順調

(概要編)

I 2023 年 6 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2023/24 年度の作況について、北半球では冬小麦等が生育期から成熟期、とうもろこし等その他の作物が生育期を迎えている一方、南米では 2022/23 年度産が収穫期を迎えている。

品目別にみると、6 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、豪州やロシアで豊作だった前年度より減産となるものの、前年度高温乾燥の被害にあったインドや EU 等で増産となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年 3 月には過去最高を更新した小麦の国際相場も侵攻時の水準を下回った。ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意は 7 月中旬に期限を迎えるが、今後も注視が必要。

とうもろこしについては、ウクライナ等で減産となるものの、米国や EU 等で増産となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、米国で増産となることに加え、今後作付けが行われる南米で前年度の干ばつから回復し、世界全体では前年度を上回る見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、4 月の 127.7 から、5 月(最新値)は 124.3 に下落（参考：2022 年 5 月 158.1、2021 年 5 月 128.1、2020 年 5 月 91.1）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値の約 7 割の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023 年 6 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の6月見通しによれば、ウクライナの2023/24年度の小麦の生産量・輸出量は、作付面積が5月見通しから引き上げられたことから前月より上方修正され、それぞれ1,750万トン（対前年度比16%減）、1,050万トン（同34%減）。とうもろこしの生産量・輸出量も同様に前月より上方修正され、それぞれ2,450万トン（同9%減）、1,900万トン（同30%減）の見通し（参考1）。

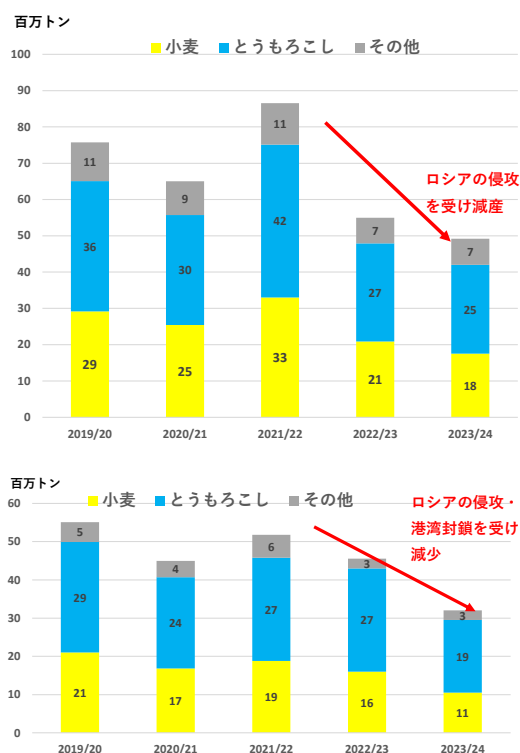
ウクライナ穀物協会の6月2日時点の予測によると、2023/24年度の穀物・油糧種子の生産量は6,800万トンと、2022/23年度の7,380万トンより7%減となる見通し。ロシア侵攻以前の過去最高だった2021/22年度の1億600万トンと比較すると36%減となっている。減産の要因として、ロシアの侵攻による軍事行動や地雷埋設、資金や農業資材の不足等としている。

品目別には、小麦は作付面積の減少により1,790万トン（2021/22年度3,300万トン、2022/23年度2,020万トン）、とうもろこしも同様に作付面積の減少により2,330万トン（2021/22年度3,760万トン、2022/23年度2,730万トン）の見通し。

黒海穀物イニシアティブの状況

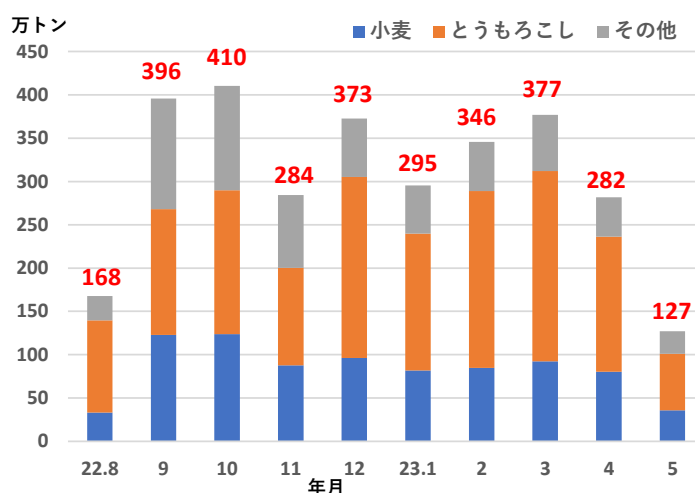
2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、同年8月以降、オデーサ港等3港から輸出を再開。2022年8月～23年5月累計の輸出量は3,058万トン（うち、とうもろこし1,542万トン、小麦839万トン他）。目的地は中国、スペイン、トルコ等。（参考2）。本合意（当初の期限は2022年11月18日、その後2023年3月18日と2度に亘り延長）は、さらに5月18日から60日間延長され、7月中旬に期限を迎える。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量（上）、輸出量（下）の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.6） 注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）黒海からの輸出量の推移（月毎）



出典：国連資料（2023.5月末時点）

注：その他はひまわり油・大麦など。陸路による輸出を除く。

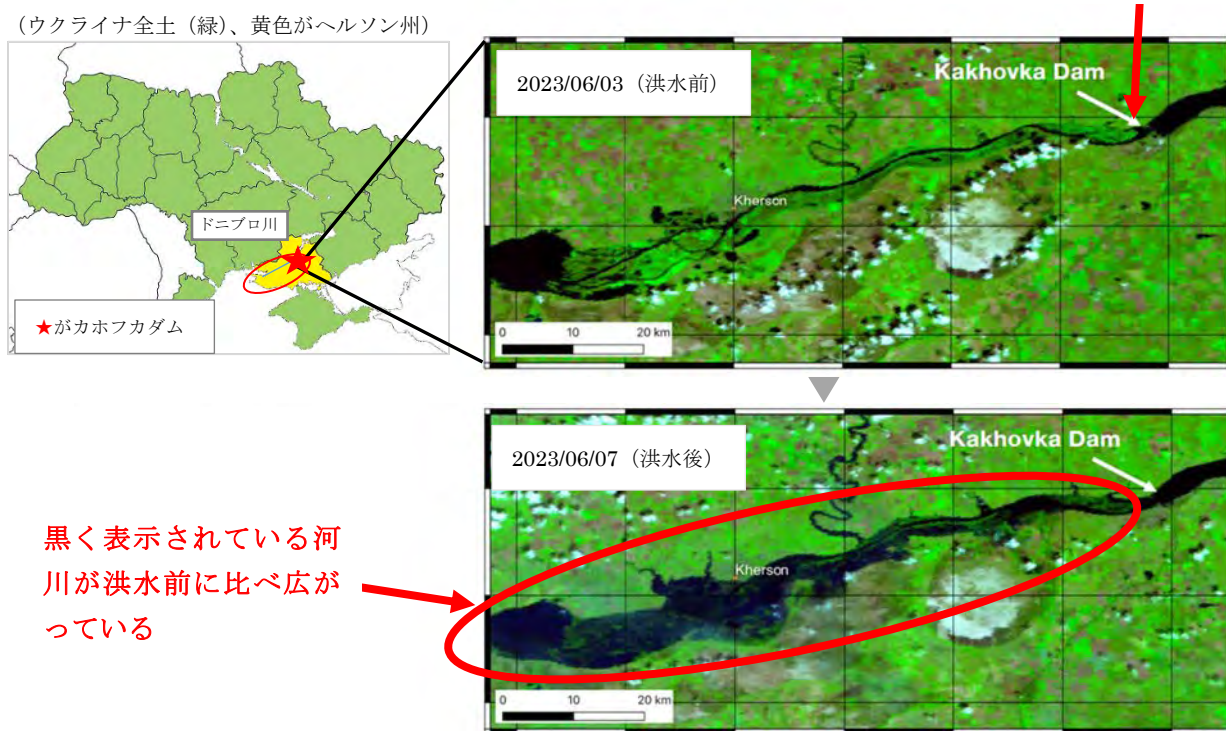
1 ウクライナでダム決壊により農地に被害も穀物生産への影響は限定的

6月6日に発生したウクライナ南部ヘルソン州を流れるドニプロ川のカホフカダムの決壊により、ウクライナ農業政策食料省によると、ヘルソン州の圃場約1万ヘクタールが浸水したとのこと。(被害面積をすべて小麦と仮定した場合、2022/23年度のウクライナの小麦の収穫面積530万ヘクタールの0.2%に相当)

米国農務省の6月公表の「World Agricultural Productuon」によれば、ウクライナ側が支配しているドニプロ川右岸では、被災した農地は限定的であったが、野菜や油糧種子向けの灌漑施設に影響があったとみられる。しかしながら、小麦や大麦は天水で栽培されているため、大きな影響はないとしている。また、とうもろこしの生産地域はウクライナ北部から中央部で、この被災地域から外れている。なお、ウクライナのとうもろこし、小麦の生産量は5月見通しより作付面積の引上げから上方修正されている。一方、ロシア側が支配している左岸地域への影響については詳細が把握できないとしている。

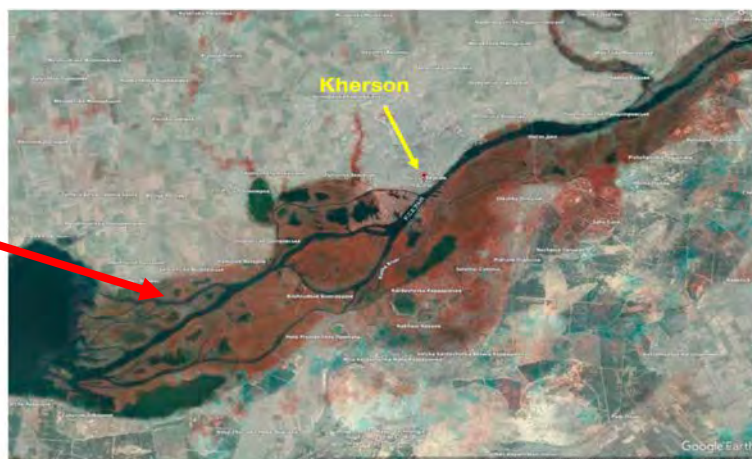
<JAXA 提供： GCOM-C (しきさい)衛星の解析画像>

カホフカダム決壊箇所



▼ 6月7日 ヘルソン市付近周辺 (湛水域が赤く表示されるように強調)

赤く表示されている部分が農地などを含む、湛水していると考えられる箇所



背景画像 google earth

2 中国の冬小麦は降雨被害で輸入増加見通し、とうもろこし・大豆の生育は順調

中国の冬小麦が成熟期から収穫期を迎えているが、主産地の河南省における5月末の豪雨の影響で品質が低下し、飼料向けグレードの小麦となる見通し。USDAの6月見通しによると、2023/24年度の小麦輸入量は、この品質低下の影響を受けて製粉用小麦が不足することから、5月見通しから150万トン上方修正され1,200万トンとなり、世界一の小麦輸入国になる見通し。

一方、東北地方では、とうもろこし、大豆、ジャポニカ米の作付けが終了した。当初降雨は少なかったが、6月上旬の降雨に恵まれ、おおむね順調に生育しているとみられる。

また、南部の夏作物も降雨に恵まれ、おおむね順調に生育しているとみられる。

3 ロシアの穀物輸出史上最高に

ロシアの穀物については、USDAによれば、2022/23年度の生産量が、1億3,673万トンで史上最高となり、2023/24年度においても春季の降雨に恵まれ、生産量が前年度に次ぎ史上2位の1億2,790万トンとなる見通し。

この結果、供給余力が潤沢にあることから、輸出量は史上最高の5,558万トンが見込まれている。中でも、小麦に関しては、前年度の生産量が9,200万トンと史上最高、2023/24年度が8,500万トンと過去5年平均（7,956万トン）を上回る豊作となり、輸出量は史上最高の4,650万トンが見込まれている。

6月以降、輸出税の基準価格が改定され、実質上輸出税が引き下げられたことに加え、6月末で輸出割当が終了したことから、7月以降、新穀の穀物輸出が本格化するとみられる。

II 2023 年 6 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、5月末、210ドル/トン台後半で推移。6月に入り、中国河南省の豪雨被害や、ウクライナのダム決壊等から230ドル/トン前後に値を上げたものの、一時220ドル/トン台半ばに値を下げた。その後、スペインや欧州北部での乾燥懸念、黒海経由のウクライナ産穀物輸出の期間を巡る合意の不透明感から値を上げ、6月下旬現在、250ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、5月末、230ドル/トン台前半で推移。6月に入り、米国中西部での乾燥懸念、ブラジル産冬とうもろこしの収穫遅れ、ウクライナのダム決壊等から、6月上旬には240ドル/トン台まで上昇。その後、米国産の低調な輸出需要等から230ドル/トン台後半まで値を下げたものの、米中西部で続く乾燥への懸念等から値を上げ、6月下旬現在、250ドル/トン台後半で推移。

コメは、5月末、520ドル/トン台半ばで推移。6月に入り、インドネシア向けの輸出需要や、エルニーニョ現象による東南アジアの2023/24年度の生産見通しに対する懸念等から値を上げ、6月下旬現在、530ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、5月末、480ドル/トン台で推移。6月に入り、米国中西部での乾燥懸念、原油高等から、6月中旬には510ドル/トン台半ばまで値を上げたものの、一時510ドル/トン台に値を下げた。その後、米中西部で続く乾燥への懸念等から値を上げ、6月下旬現在、540ドル/トン台前後で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 3.3%増の 28.3 億トン。消費量は、前年度より 1.8%増の 28.2 億トンとなり、2019/20 年度以来、4 年ぶりに生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は、前年度を上回り 27.7%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.3 億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.2 億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加し、5.1 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.8 億トンと前年度より増加、期末在庫率は、前年度より上昇する見込み。

（注：数値は 6 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

IV 2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.7 億トン。消費量は前年度を上回り 6.4 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は 2 年ぶりに前年度を上回る 21.7%となる見込み。

（注：数値は 6 月の USDA「Oilseeds : World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：最近の異常気象と世界の穀物生産への影響

アルゼンチンなど南米の穀物生産に大きな影響を与えてきたラニーニャ現象が本年2月で収束した。気象庁や米国海洋大気局の6月報告によれば、5月以降エルニーニョが発生し、今後強まる可能性があり、3年連続豊作だった豪州などでは穀物生産量が減少するとの懸念もある。また、生育期を迎えた米国のコーンベルトでは乾燥傾向となっている。一方、中国の冬小麦は収穫期に降雨被害があった。最近の世界の異常気象の穀物生産への影響をまとめた。

注：文中の「2023/24年度」等は穀物年度で、豪州の小麦は2023年10月から2024年9月。国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

表 2000年以降のエルニーニョ・ラニーニャ現象

1 エルニーニョ・ラニーニャの推移

(1) 過去の穀物生産への影響

気象庁などによると、「エルニーニョ現象」とは、太平洋赤道域の日付変更線付近から南米沿岸にかけて海面水温が平年より高くなり、その状態が1年程度続く現象である。逆に、同じ海域で海面水温が平年より低い状態が続く現象は「ラニーニャ現象」と呼ばれ、それぞれ数年おきに発生するといわれている。

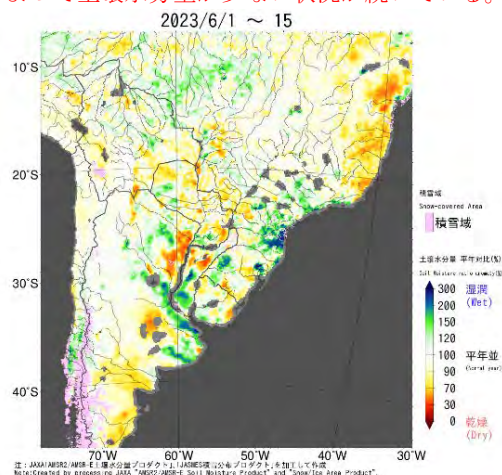
過去、エルニーニョの年は豪州などで干ばつとなり穀物生産に影響があった。一方、ラニーニャの年又はその翌年にはアルゼンチンなど南米で干ばつとなり、それぞれ穀物生産に影響を与える可能性があるといわれている。

(2) ラニーニャの収束とエルニーニョの発生

本年2月には、アルゼンチンなどの穀物生産に影響を与えたとみられるラニーニャ現象は収束したとみられている。豪州農業資源経済科学局(ABARES)が6月6日に公表した「Crop Report」によると、7月以降エルニーニョが発生し、豪州の穀物生産に大きな影響を与える可能性があるとして発表。また、米国海洋大気局(NOAA)は5月末にエルニーニョ現象となったと公表し、気象庁も5月からエルニーニョ現象が発生したと公表した。

(参考) 6月前半の南米の土壌水分量平年対比

地域によって土壌水分量が少ない状況が続いている。



2 各国の穀物生産への影響

(1) アルゼンチン

アルゼンチンは、ラニーニャ現象によりもたらされた60年に一度といわれる干ばつで穀物生産は軒並み大幅な減産となった。ブエノスアイレス穀物取引所の見通しによると、2022/23年度産の小麦は収穫が終了したが、1,240万トンと過去最高だった前年度と比べて45%減となった。大豆は収穫が終盤で生産量は2,100万トン(同53%減)、とうもろこしは収穫期で3,600万トン(同31%減)と大幅な減産となった。6月に入り、2023/24年度産の小麦の作付けが開

(JASMAI : <https://jasmai.maff.go.jp/>)

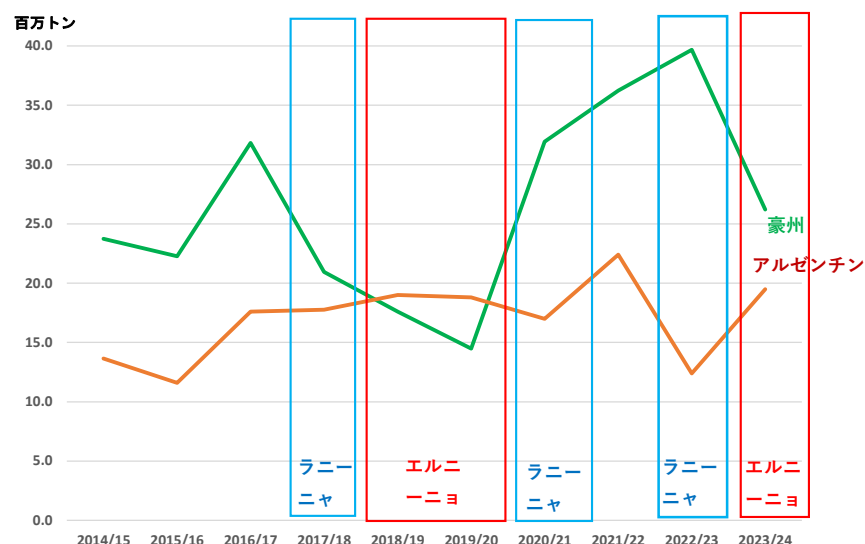
始されたが、土壌水分不足により作付けが遅れている。

この干ばつの影響を受け、アルゼンチンは小麦、大豆を始めとする穀物や油糧種子の輸出量が大幅に減少し、逆に国内の搾油用大豆を確保するため、ブラジル及びパラグアイから大量に輸入したこと等から、2022/23 年度は世界第3位の大豆輸入国になった。ただし、米国農務省（USDA）の見通しによれば、ラニーニャの収束に伴い、2023/24 年度の穀物・大豆生産量は回復するとみられている。

図 エルニーニョ・ラニーニャ現象と豪州・アルゼンチンの小麦生産

(2) 豪州

ABARES「Crop Report」によると、2018/19 年度、2019/20 年度と2年連続のエルニーニョ現象により干ばつ被害を受け減産となった。その後、ラニーニャに転じ、2020/21 年度以降、3年間降雨に恵まれ、小麦生産量は毎年過去最高を更新し、2022/23 年度は3,969 万ト



(出典：アルゼンチン「ブエノスアイレス穀物取引所」、2023/24 年度のみ USD[「PS&D」(2023.6)

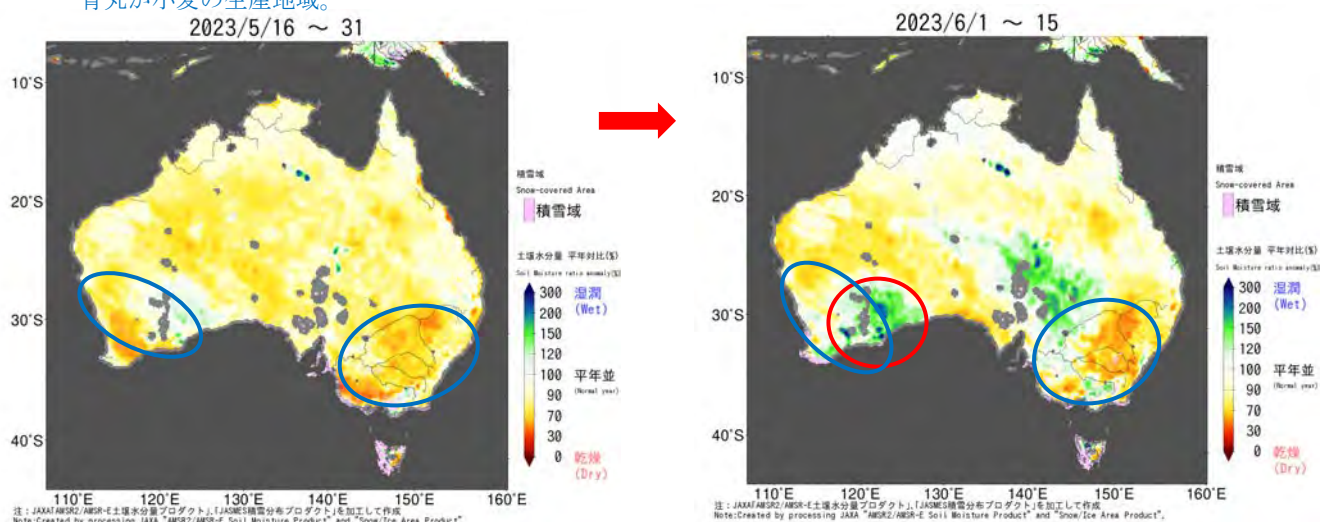
豪州 ABARES「Crop Report」をもとに農林水産省で作成)

ンとなった。2022 年2月に発生したロシアのウクライナ侵攻により世界的な小麦供給に懸念が生じたが、豪州からの小麦供給が潤沢であったため、主要小麦輸入国のインドネシアはウクライナ産から豪州産に輸入を切り替えた。

しかし、2023/24 年度の生産量については、エルニーニョに転ずるとの予測を受け、対前年度 34%減の 2,621 万トンとなる見通し。ただし、過去5年平均と比較すれば6%減に留まる見通し。

(参考) 5月後半から6月前半にかけての豪州全域における土壌水分量平年対比推移

5月下旬は豪州全土で土壌水分量が少ない傾向にあったが、6月上旬の降雨により一部地域(赤丸)は、やや改善されたように見受けられる。
青丸が小麦の生産地域。



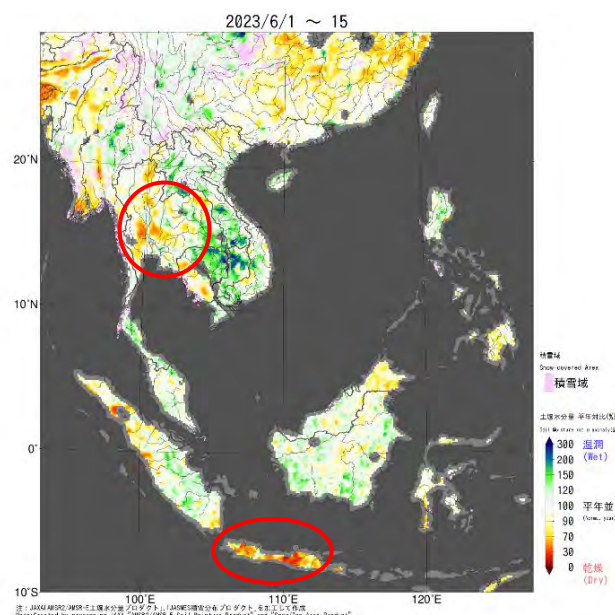
(3) 東南アジア

エルニーニョ現象の発生により、豪州に隣接した東南アジア諸国のコメ生産にも影響があるといわれている。USDA の 6 月の生産見通しによれば、雨季を迎えたタイでは 2023/24 年度の生産量が降雨不足で 80 万トン下方修正され、1,970 万精米トンの見通し。同様にモンスーンの到来遅れにより、カンボジアの生産量も 22 万トン下方修正され 600 万精米トンの見通しとなっている。

一方、世界におけるコメの生産量で3位を争うインドネシアでは、コメ生産の5割以上がジャワ島で生産されているところ、5月後半から6月前半にかけての土壌水分量が例年と比べて大幅に少なくなっている。ただし、USDAの6月の生産見通しによれば、インドネシアではコメの生産量が3,445万精米トンと据え置かれている。

(参考) 6月前半の東南アジアにおける土壌水分量平年対比

タイ、カンボジアの一部地域、
ジャワ島で土壌水分量が少ない（赤丸）。



(JASMAI : <https://jasmai.maff.go.jp/>)

(4) 米国コーンベルトからカナダ

エルニーニョ現象の発生と直接の関係性があるか判断が難しいが、米国コーンベルトからカナダでは、5月後半から6月前半にかけて乾燥傾向となっている。

6月20日付けのUSDA「Crop Progress」によれば、とうもろこし、大豆の作付けは概ね終了し、生育期を迎えているところ、作柄評価が、乾燥の影響で「良～やや良」の比率が、前週と比較して大豆は59%から54%へ、とうもろこしは61%から55%へそれぞれ引き下げられた。

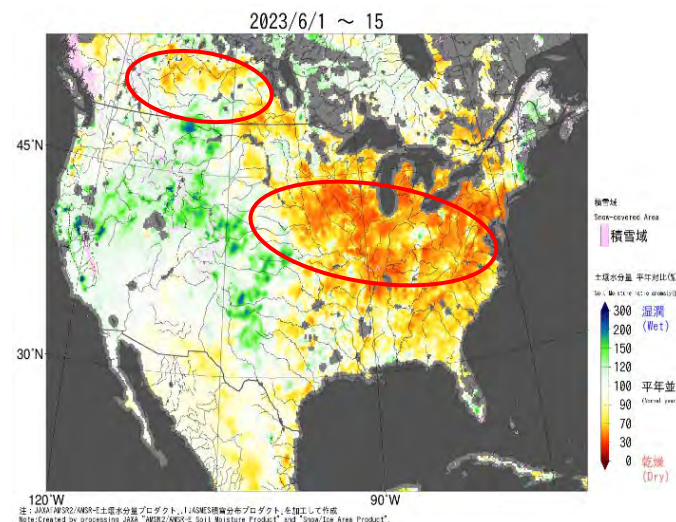
さらに、この乾燥により、カナダ・ケベック州などでは乾燥の影響を受けて山火事も発生し、米国東部まで煙が蔓延した。

しかしながら、USDA の 6 月の生産見通しでは、とうもろこし (3 億 8775 万トン)、大豆

(1億2,274万トン)の生産量は、史上最高で据え置かれ、小麦の生産量はわずかに上方修正され4,532万トンとなった。カナダに関しても、小麦の生産見通しは3,700万トンで変更なく、今のところ乾燥による生産量への影響は報告されていない。

(参考) 6月前半の北米～カナダにおける土壌水分量平年対比

コーンベルトからカナダ西部にかけて土壌水分量が少なく乾燥傾向（赤丸）。



(JASMAI : <https://jasmai.maff.go.jp/>)

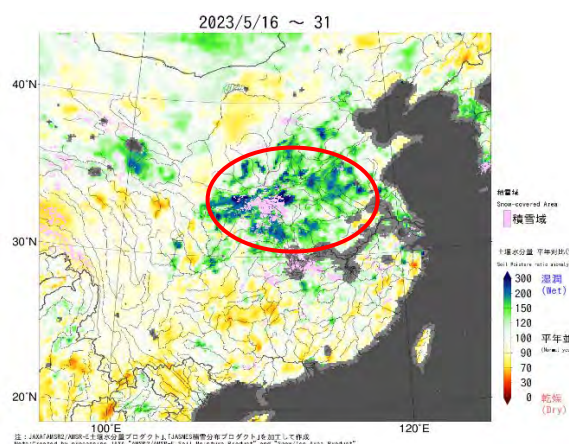
(5) 中国

エルニーニョ現象が発生すると、中国東部で降雨過多となる傾向があるといわれている。小麦は、5月末に主産地の河南省などで成熟期から収穫期を迎えたが、豪雨被害により品質が劣化し、飼料グレードの小麦が多く発生した。USDAの6月見通しによれば、生産量は1億4,000万トンと変更ないものの、高品質小麦の輸入が増加し、2023/23年度(1,400万トン)、2023/24年度(1,200万トン)と2年連続で世界一の小麦輸入国となる見通し。

一方、とうもろこしや大豆、ジャポニカ米の主産地の東北地方では当初降雨が不足していたが、6月以降降雨に恵まれ、順調に生育しているとみられる。中部、南部においても降雨により夏作物はおおむね順調に生育しているとみられる。

(参考) 5月後半の中国における土壌水分量年対比

河南省付近の土壌水分量が多い(赤丸)。



(JASMAI : <https://jasmai.maff.go.jp/>)

3 世界の穀物貿易への影響

(1) 堅調な中国の穀物輸入とインドの輸出規制

2023/24年度のUSDAの6月時点の見通しではあるが、中国は、上記の小麦に加え、とうもろこし(2,300万トン)、コメ(500万トン)、大豆(1億トン)とすべての品目で世界1位の輸入国となっている。黒海穀物イニシアティブを通じたウクライナからの輸入でも、中国が1位となっている。天候不順により生産減となれば輸入量はさらに増加する可能性もある。

一方、インドは2022/23年度産米が史上最高の豊作(1億3,600万トン)、2023/24年産小麦も成熟期の高温の影響は軽微であり、史上最高の生産量の1億1,350万トンが見込まれている。しかし、小麦と碎米の輸出禁止などの輸出規制は継続するとみられる。

(2) 米国の需給緩和

USDAの6月見通しでは、3月末に公表された作付意向調査面積を基に、5月に公表された2023/24年度の史上最高のとうもろこし、大豆の生産見通しを前提に、とうもろこしの期末在庫率は15.6%(前年度10.6%)、大豆の期末在庫率は7.9%(前年度末5.3%)と過去3年間の低水準から改善する見通しとなっている。小麦も前年度より増産となり、在庫率も30%台で踏み留まっている。ただし、6月の高温乾燥の影響は反映されていないと見られる。

(3) 今後の動向

6月6日にはウクライナ南部のカホフカダムが決壊し、農地や灌漑システムへの影響が発生したとの報道があった。短期的には、とうもろこしの主産地でないこと、小麦・大麦は天水で栽培されていること等から、穀物需給への影響は現時点では限定的とみられている。

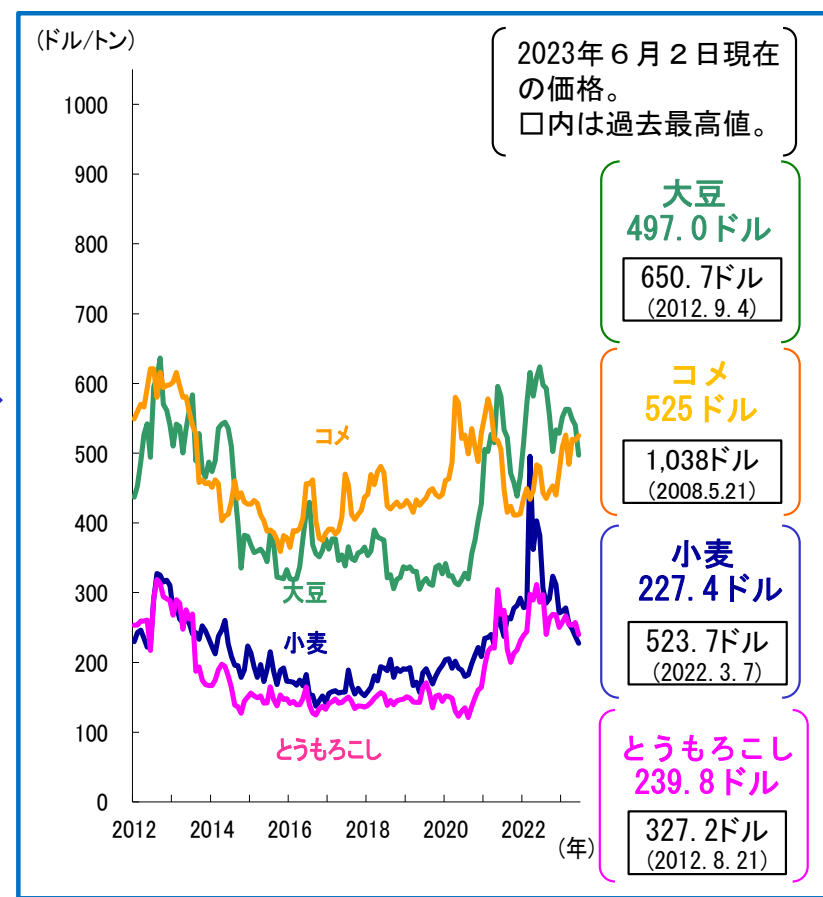
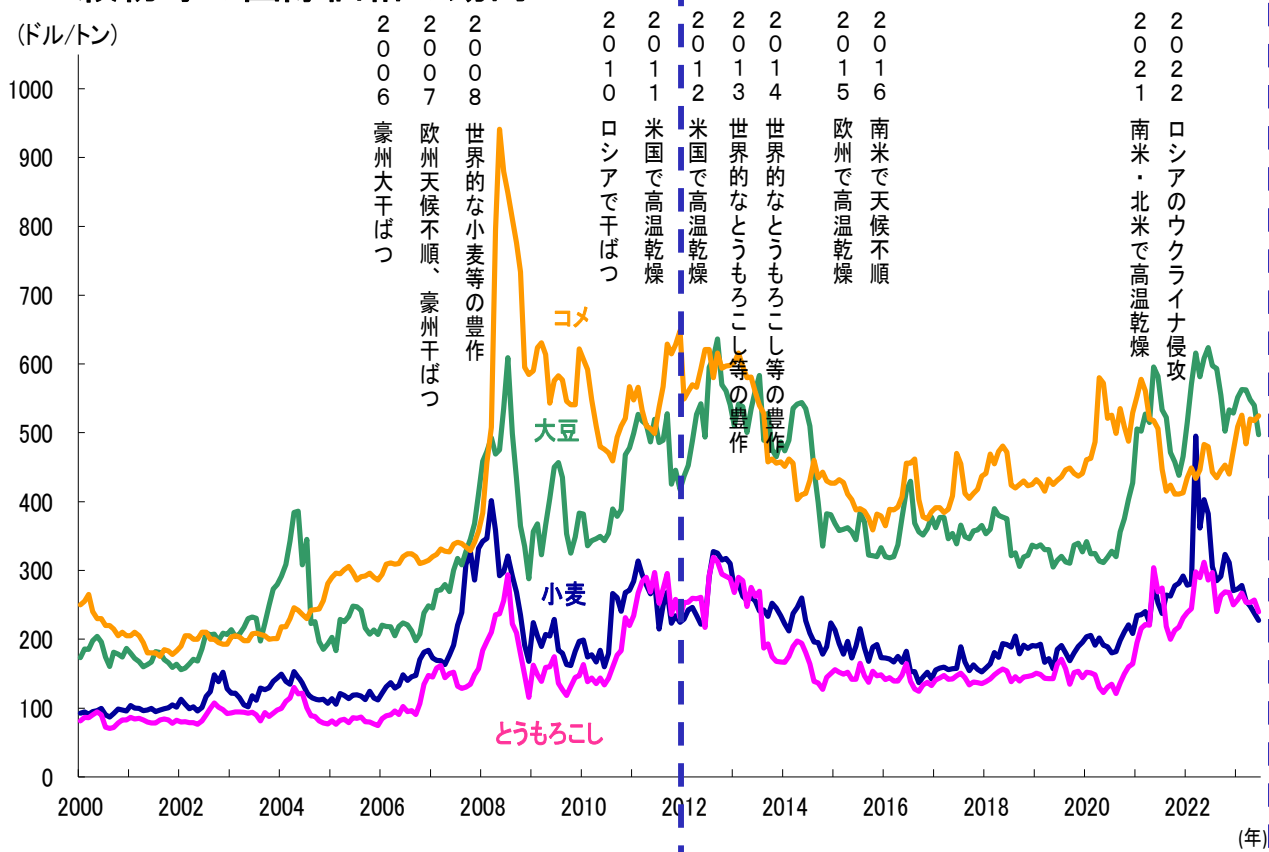
一方、6月中旬には南アフリカやエジプトなどアフリカ7か国の代表が、食料危機の回避などを求め、ウクライナのゼレンスキー大統領、ロシアのプーチン大統領にそれぞれ停戦に向けた和平を提案したが、特段の進展がなかったとみられる。

各国においてエルニーニョの影響を始め、降雨不足などの天候不順による穀物生産への影響が報告されている中、黒海穀物イニシアティブが期限を迎える7月中旬には、米国のとうもろこしが受粉期を迎える。6月末には、米国・カナダの作付面積調査が公表されるが、今後、北米の乾燥天候により生産見通しが影響を受けた場合、中国の需要が堅調である中、国際需給や価格への影響が懸念される。引き続き国際穀物需給・価格動向に注視が必要。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆は、アルゼンチンの干ばつから依然として高水準。コメは、2013年以降低下も、2020年ベトナムの輸出枠設定等で一時的に上昇。2022年9月以降、インドの輸出規制やインドネシアの需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



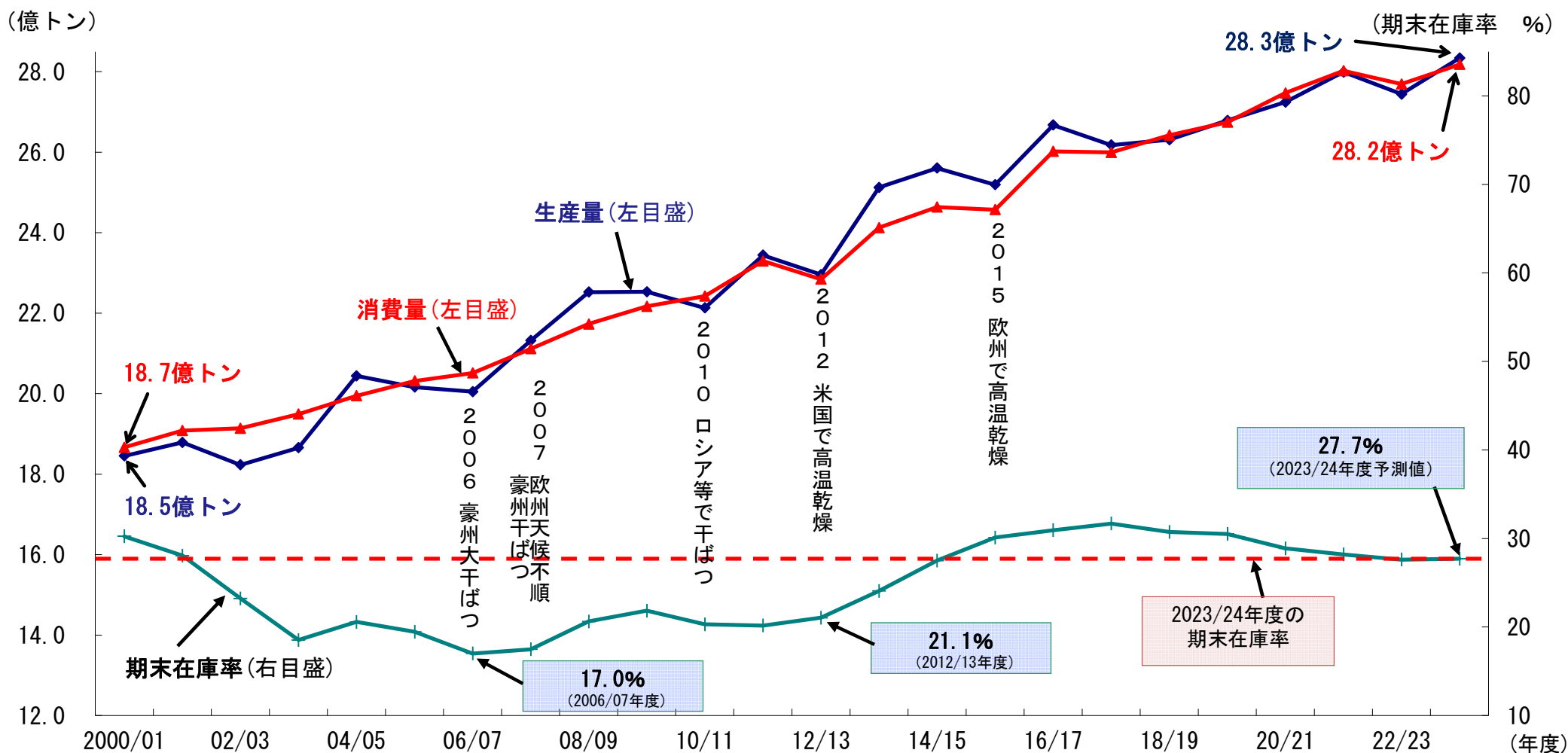
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である（但し、4月は7日が休場であったため、6日の価格）。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である（ただし、6月は5月31日が休場であったため、5月24日の価格）。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回り、前年度より増加し、27.7%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

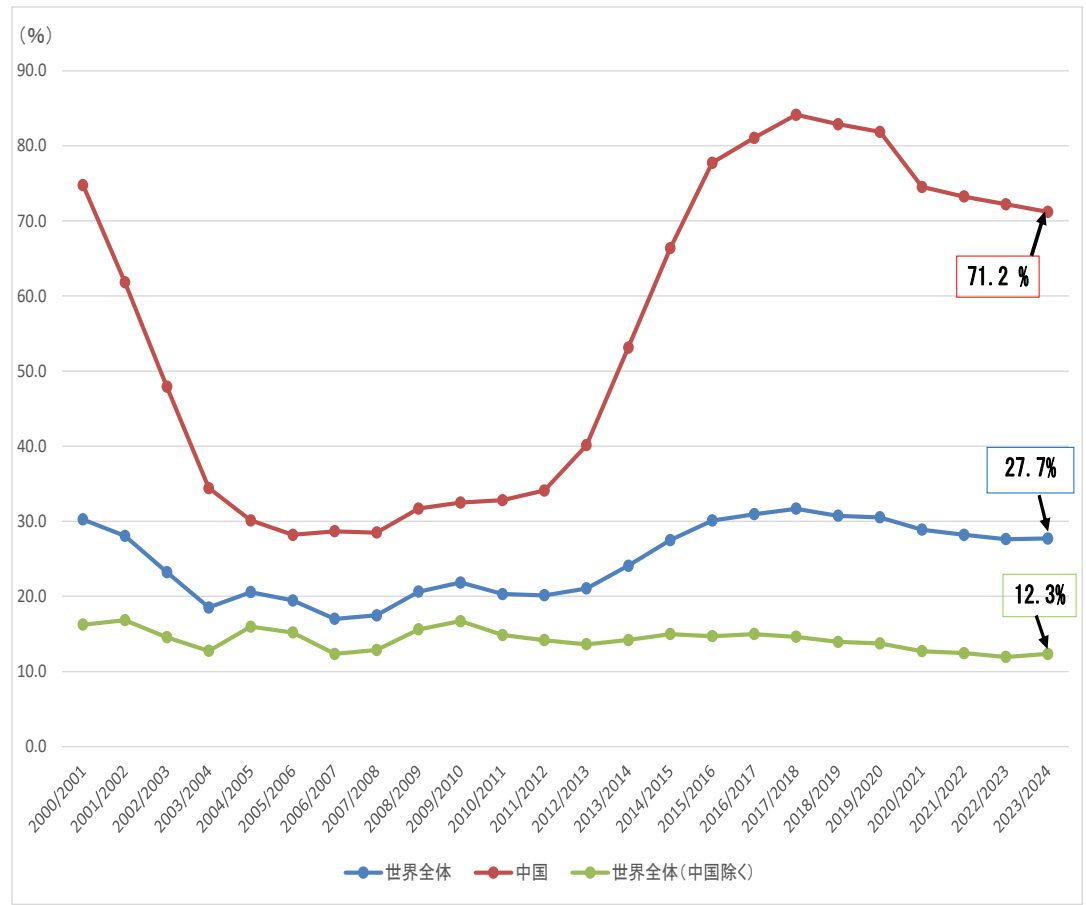


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(June 2023)、「PS&D」

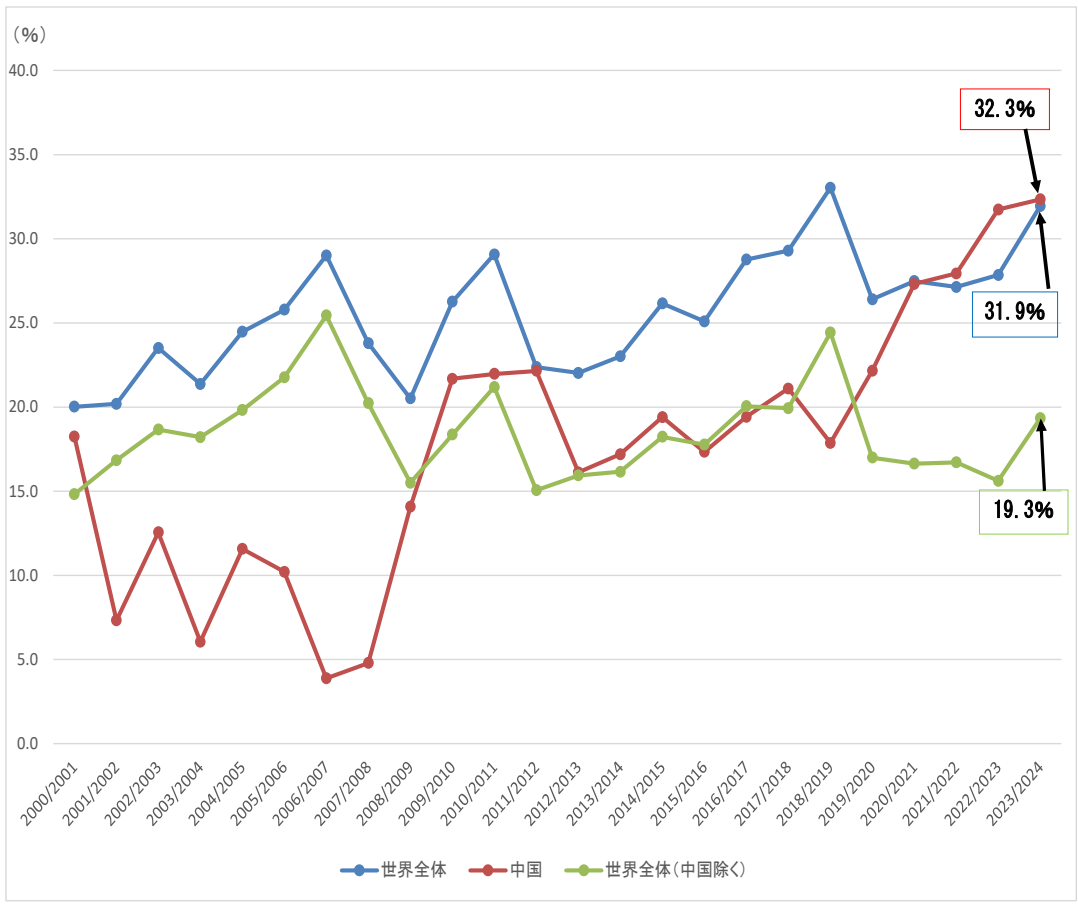
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



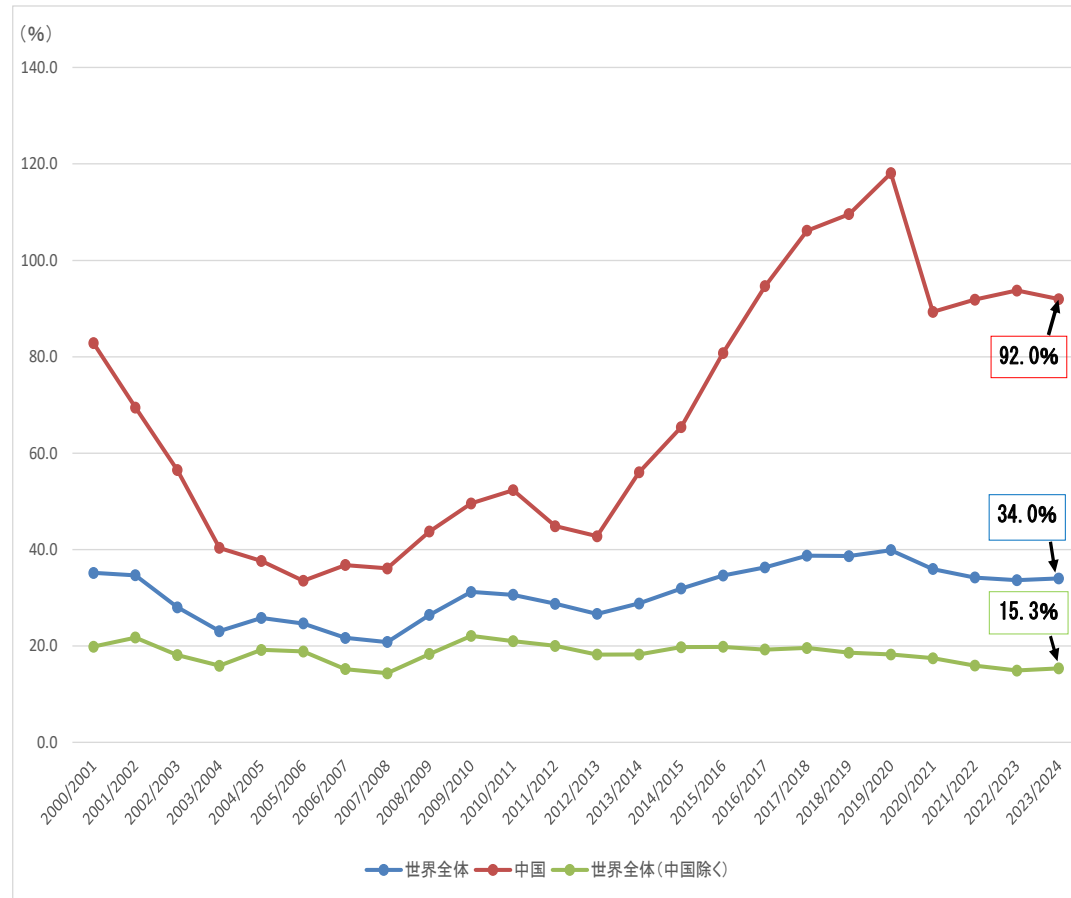
○ 大豆の期末在庫率の推移



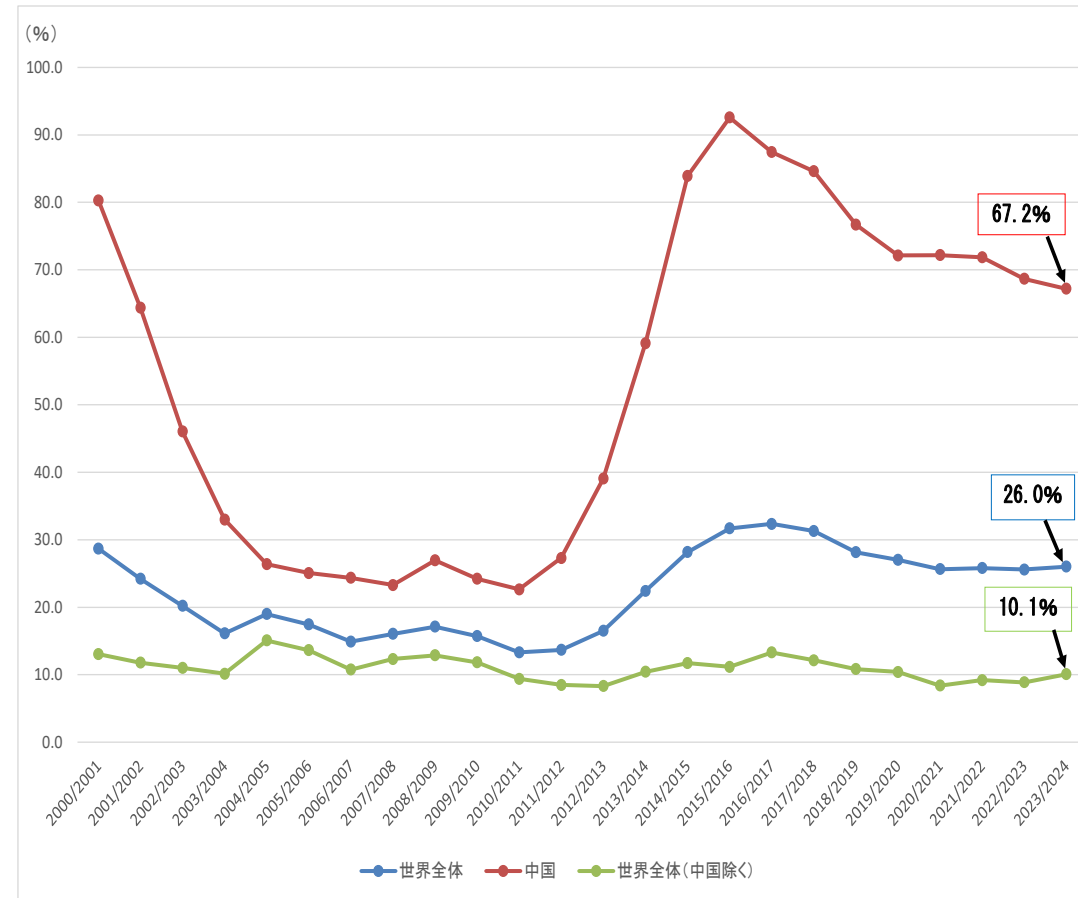
資料: 米国農務省「PS&D」(June 9, 2023)
 注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。
 2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100
 3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100
 4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(June 9, 2023)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

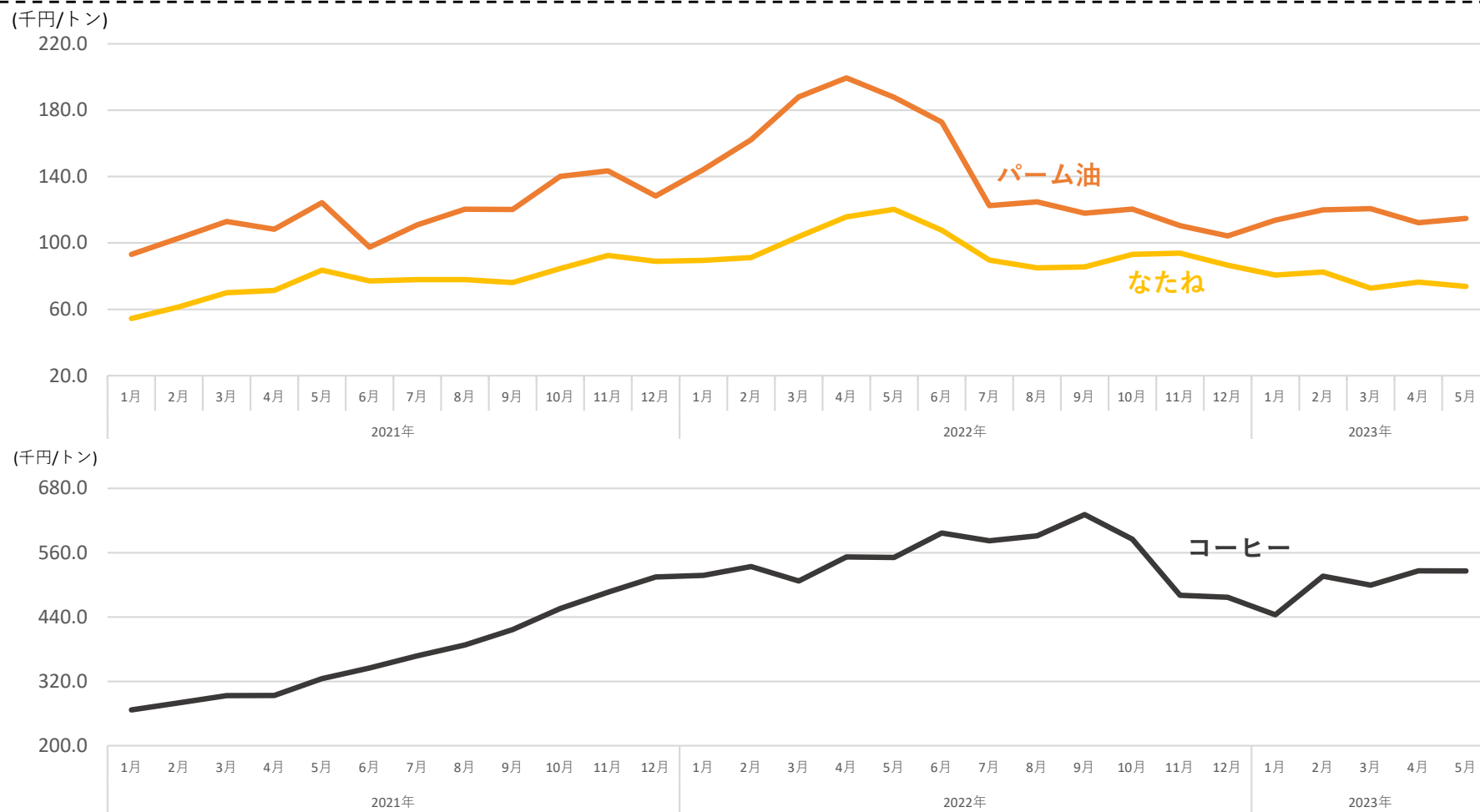
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年に熱波による減産があったが、2022年は回復基調から平年並みの収量に近づいた**。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。



2023年6月20日現在
□内は2020年4月以降の最高値。

パーム油
114.7 千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
73.8千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

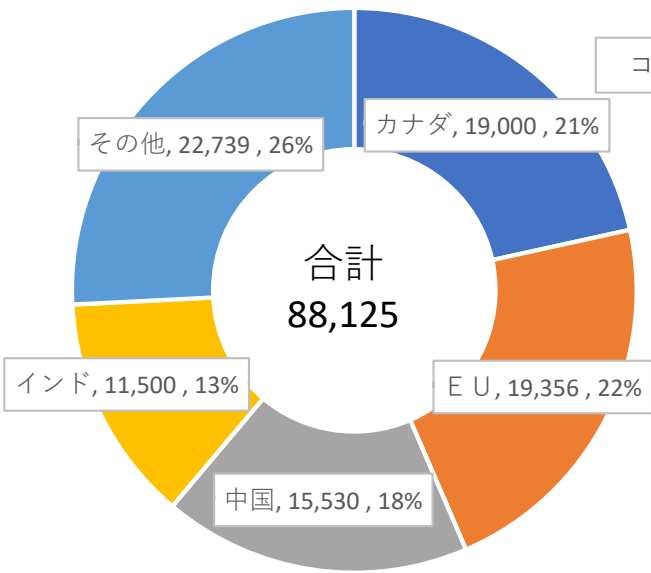
コーヒー
526.1千円/トン
631.1千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

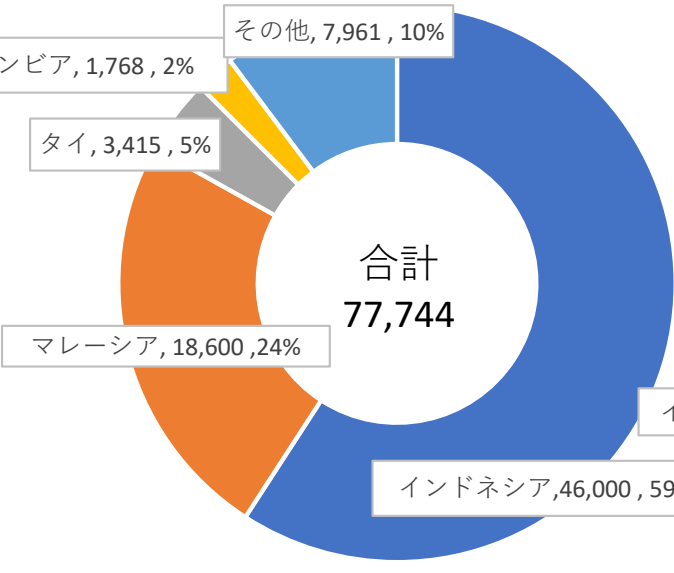
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



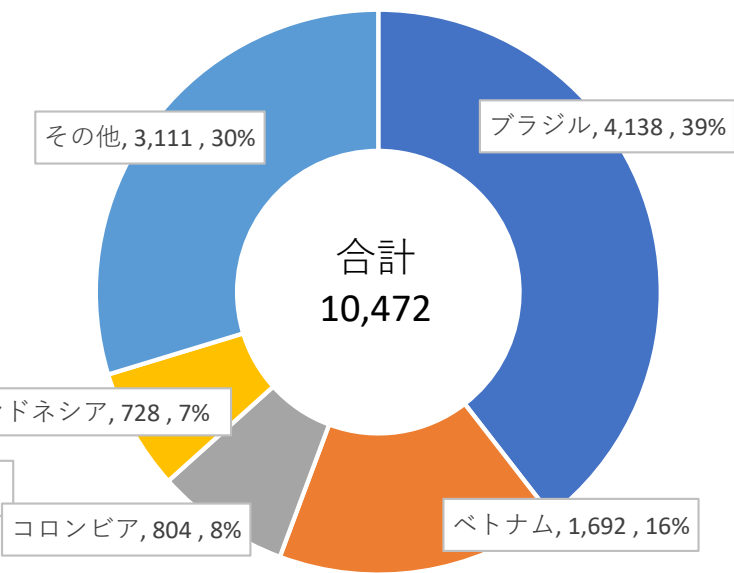
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年				
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年				
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年				
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
コーヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年5月の国内の加工食品の消費者物価指数は107.7～164.1（前年同月比で6.6%～27.8%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年11月～令和5年5月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4		R5					
品目	平均	平均	平均	平均	平均	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	114.2	114.1	115.0	115.0	114.3	114.8	115.3	7.2%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	114.2	111.6	113.1	114.6	113.1	113.9	111.4	11.3%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	109.1	109.9	110.3	110.4	112.0	114.5	114.6	10.2%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	162.7	162.5	164.0	163.9	164.3	163.0	164.1	21.3%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	104.9	104.4	104.5	105.9	106.5	107.1	107.7	6.6%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	136.1	137.4	137.3	137.2	139.0	148.6	152.3	20.8%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	118.6	117.5	119.2	121.4	121.9	133.9	134.5	27.8%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	98.5	98.7	98.6	98.6	98.9	109.8	111.2	11.8%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	107.9	108.3	108.7	109.4	110.2	111.6	112.1	9.2%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年12月～令和5年6月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4	R5							
品目	平均	平均	平均	平均	平均	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	112.2	111.5	110.7	111.3	111.3	111.3	111.3	0.0%	5.1%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	110.6	111.2	111.2	110.6	110.6	111.8	121.6	8.8%	10.5%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	107.6	108.5	108.1	110.2	113.7	114.1	115.0	0.8%	11.8%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	161.2	162.2	162.2	161.9	161.2	161.2	160.6	-0.4%	21.0%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	102.7	102.3	103.4	103.6	105.2	105.0	105.2	0.2%	6.5%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	128.3	129.6	128.9	130.3	137.9	142.7	144.4	1.2%	22.1%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	110.9	116.9	118.4	117.9	129.3	130.3	130.7	0.3%	24.5%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	98.6	98.6	98.6	98.4	108.9	110.3	110.7	0.4%	11.5%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2023年7月号（6月26日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）供給頭数の減少などを背景に、肥育牛価格は高水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002791.html

（豪州）牛肉輸出量、中国向けが大幅増で輸出先第1位に

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002792.html

（中国）牛肉生産量の増加傾向続く

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002793.html

◆豚肉

（EU）価格上昇により豚肉輸出量が大幅減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002794.html

（チリ）22年の豚肉生産量は3年ぶりに前年を下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002795.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）乳価の下落大きく、経産牛飼養頭数減少へ転じる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002822.html

（EU）依然高水準は、生乳取引価格も下落続く

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002823.html

（NZ）生乳生産は好調も、乳製品国際相場の低迷から乳価は引き下げへ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002824.html

（中国）生乳生産量増加も乳価の下落止まらず

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002825.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）23/24年度の米国の輸出量は大幅増も、ブラジルが引き続き最大の輸出国に

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002826.html

（世界：大豆）23/24年度の大豆需給、南米の生産増などから生産、輸出は増加見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002827.html

（米国）23/24年度の米国の生産量は過去最高の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002828.html

（中国）23/24年度のトウモロコシおよび大豆の需給見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002829.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2023.6)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】★シンガポールの食料事情②：食文化と消費嗜好

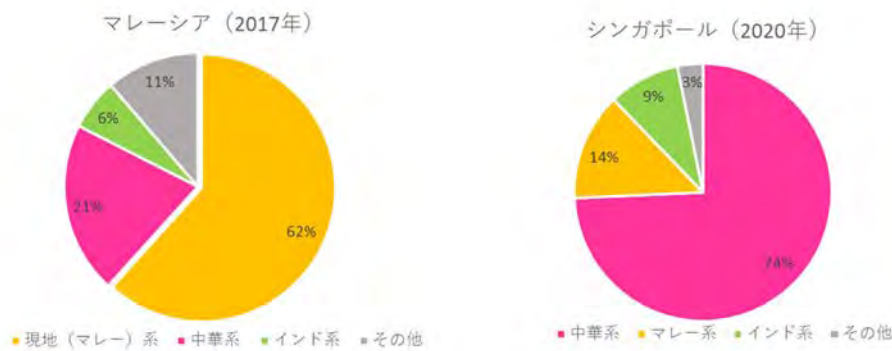
前回は、シンガポール政策というマクロの視点のお話を書かせて頂きましたが、今回は、シンガポールの食文化や食習慣、食のトレンドなど、より身近な視点でのお話をしたいと思います。

1. シンガポールの民族構成と食文化

シンガポールの食文化は、国の成り立ちと大きく関係しています。シンガポールは第二次大戦後の1963年、マレーシアとともに英国領から独立をしました。一方、元々中華系人口が多かったシンガポールは、マレーシアのマレー人優遇政策に反対し、わずか2年後の1965年にマレーシアから独立しました。

そのため、マレーシアの民族構成は現地（マレー）系が6割、中華系が2割、インド系が1割である一方、シンガポールは対照的に中華系が7割、マレー系とインド系が1割となっています。なお、シンガポールは英語が公用語で義務教育の必修ですが、それ以外の「母国語」も必修で、中国語・マレー語・タミル語から選択することになっています。

（マレーシア及びシンガポールの民族構成）



このような独立経緯から、シンガポール政府は建国当時から各民族の融和政策に腐心してきました。そのため、公営団地（HDB）への入居者の比率は、国の民族比率と同程度になるよう配慮をしています。加えて、団地敷地にはホーカー（屋台街）やコミュニティ・センター（公民館）を配置して民族間の融和を行っています。

その結果、シンガポールでは民族間の対立は非常に少なく、特定民族が集中した居住エリアが無いという他国には見られない特徴があります。

2. シンガポール料理

このように3つの民族の影響を受けていますので「シンガポール料理」と言っても多様です。例えばシンガポール名物として有名な「海南チキンライス」は中国南部が発祥ですし、日本でも最近人気となっている香辛料を効いたココナッツスープの麺料理「ラクサ」はマレーシアから伝わったものです。その他にも、インド料理に影響を受けた「ビリヤニ」（スパイシーな炊き込みご飯）、などもあります。

（海南チキンライス）



（ラクサ）



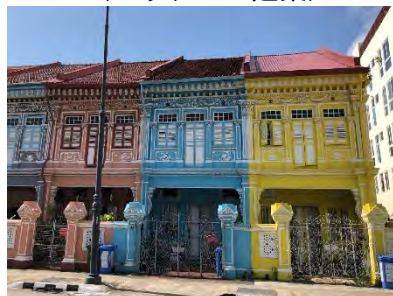
（ビリヤニ）



なお、シンガポールには「プラナカン」という文化があります。プラナカンとはマレー語で「地元生まれの子」という意味で、東南アジアに移住した中国人とマレー人との間に生まれた子孫の下で栄えた文化です。

例えば鮮やかな色合いのプラナカン建築がありますし、プラナカン文化で生まれた「ニョニャ料理」はマレー・中華・タイ・インドネシアなど様々な料理の影響を受けた多国籍料理です。

(プラナカン建築)



(ニョニャ料理)



3. シンガポール人の食嗜好と健康政策

このようなシンガポールには様々な料理がありますが、蒸し暑い気候のため、他の東南アジア諸国の料理と同様、スパイスを多く使って濃い味付けの料理が多いです。

加えて、甘いものが好きで、特に飲み物から摂取する糖分の量が非常に多いです。コーヒーにも大量の練乳や砂糖を入れますし、緑茶も「無糖」を買わないとかなり甘いです。加えて日本でも昔ブームになりましたタピオカティー（こちらではバブルティー/パールティーと言います）は変わらず人気で、60 超のブランドがあります。

(シンガポールの甘いコーヒー (Kopi) とタピオカティー)



また、砂糖以外にも、コメや麺が主食のため炭水化物の摂取量が多く、2015 年の調査では、糖尿病疾患率は米国について世界ワースト 2 位（成人の 10.5%）となっており、深刻な社会問題となっております。

そのため、シンガポール健康促進局は健康政策の中でも特に摂取糖分の減少政策を奨励しており、その 1 つとして、昨年から飲料を糖分・不飽和脂肪酸の含有量に応じて商品を 4 段階に分け、評価の低い C と D に成分表示を義務化しました。更に D は全てのメディアでの宣伝を禁止するという厳しい措置を取っています。カテゴリー C には生乳が含まれますし、カテゴリー D には 100% 果汁ジュースが含まれるため、本当に健康への影響を反映しているのか疑問ですが、この政策への政府の厳しい姿勢が伺えます。

(飲料分類と分類毎の規制)

グレード	A	B	C	D
表示の色	濃い緑	緑	オレンジ	赤
表示の義務の有無	無	無	有	有
広告の規制の有無	無	無	無	有
砂糖含有量(100ミリリットル当たり)	1グラム以下、または無糖	1〜5グラム以下	5〜10グラム以下	10グラムを上回る量
不飽和脂肪酸量(100ミリリットル当たり)	0.7グラム以下	1.2グラム以下	2.8グラム以下	2.8グラムを上回る量
飲料の例:	・水 ・無糖茶 ・スキムミルク ・植物性ミルク(甘味料なし)	・低脂肪牛乳 ・ダイエット飲料 ・砂糖・ミルク入り飲料(低糖・低脂肪)	・フル・ファットミルク(脂肪分の高い牛乳) ・フレーバーミルク(甘味入り牛乳) ・砂糖・ミルク入り飲料	・清涼飲料水 ・エネルギー飲料 ・果汁100%ジュース ・甘味飲料 ・砂糖・ミルク飲料(高脂肪)

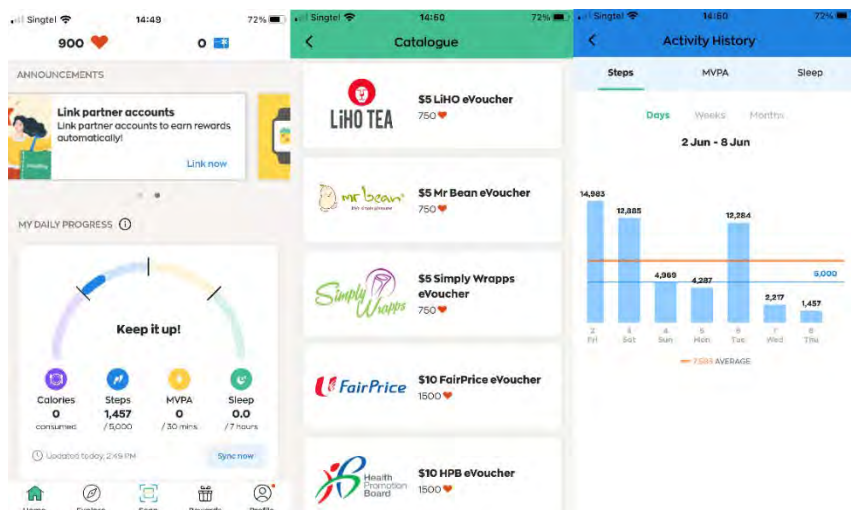
(注)グレードは、砂糖含有量が、不飽和脂肪酸量のいずれが多い方で判断される。例えば砂糖の含有量が100ミリリットル当たり1グラム以下であっても、不飽和脂肪酸量が同2.8グラム超の場合は「D」となる。

(生乳と 100%ジュースのラベリング例)



加えて、健康促進局は運動を促し食習慣を改善するアプリ「Healthy 365」の開発・普及もしています。これは、一定以上の運動をしたり、健康的な食品（玄米、豆腐、野菜、無糖飲料など）を買うとポイントが貯まり、ポイントに応じて割引クーポンが貰える仕組みとなっています。私もこのアプリを使っていますが、1万歩歩いて貯まるポイントと野菜を1つ買って貯まるポイントが同じですので、自然と野菜に手が伸びるようになります。

（アプリ「Healthy 365」画面）



4. ガーデニングブーム

最後に、シンガポールでのガーデニングブームと、それに対する政府の支援にも言及させていただきます。コロナ下において、日本と同様にシンガポールでもガーデニングがブームとなりました。前回のコラムに書かせて頂きましたが、政府は 2019 年に自給率向上目標を設定しましたが、その政策の一環として、国立公園局 (National Parks Board) は、国立公園内に近隣住民が家庭菜園を行えるコミュニティ・ガーデンの整備を拡充したことも、このブームを後押ししております。

現在、25 の国立公園内に約 2 千区画が設置されており、2.5m x 1m の区画は年間 57 ドル（約 5800 円）で借りられます。なお、野菜直売所が整備されている公園もあります。

（国立公園内のコミュニティ・ガーデン）



また、これ以前の 2006 年より、国立公園局は「花に囲まれたコミュニティ活動 (Community in Bloom Initiatives)」という地域コミュニティでの環境教育・農業教育にも取り組んでおり、公営団地や公園の敷地で果物や野菜を栽培するなど、国内の限られた土地を活用して食育にも積極的に取り組んでおります。

(Community in Bloom Initiatives の活動例)



今回は、主にシンガポールの消費者の食文化や嗜好についてご説明させて頂きましたが、次回は、そのようなシンガポールの消費者は日本食にどのような関心を持っているのか、日本食普及の最新状況や普及のための課題についてお話させて頂ければと思います。

文責：伊藤 哲也

(日本貿易振興機構(ジェトロ) JF00D シンガポール代表)

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

【データ・画像出典】

・JETRO「カンントリーレポート：シンガポールの食品市場」

https://www.jetro.go.jp/ext_images/agriportal/platform/sg/pf_spr.pdf

・シンガポール統計局

<https://www.singstat.gov.sg/find-data/search-by-theme?theme=population&type=all>

・シンガポール教育省

<https://www.moe.gov.sg/>

・シンガポール健康促進局

<https://hpb.gov.sg/healthy-living/food-beverage/nutri-grade>

<https://hpb.gov.sg/healthy-living/healthy-365>

・Will Fly for Food

<https://www.willflyforfood.net/>

・ Eatbook

<https://eatbook.sg/>

・ SingaLife

<https://singalife.com/category/64039/>

・ Diabetes Singapore

<https://www.diabetes.org.sg/about-diabetes/the-singapore-demographics-of-diabetes/>

・ SingaLife

<https://singalife.com/category/64039/>、<https://singalife.com/category/68776/>、<https://singalife.com/category/47151/>

・ Grab 「SG Food & Grocery Trends 2022」

<https://www.grab.com/sg/merchant/food-and-grocery-trends-report-2022/>

・ Britannica

<https://www.britannica.com/place/Singapore/The-people>

・ 国立公園局

<https://www.nparks.gov.sg/gardening/allotment-gardens>

<https://www.nparks.gov.sg/learning/programmes-for-schools/kids-for-nature-pal-outdoor-education>

<https://www.nparks.gov.sg/cih>

本コラムは、執筆者が現地活動で得られた情報や公開情報に基づいて作成したものです。あくまで情報提供を目的としたものであり、その正確性、相当性、完全性を保証するものではなく、当省が本コラムに従って決断した行為に起因する損失等に対して責任を負うことはありません。

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比 前月比

- ・インド、ロシア、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

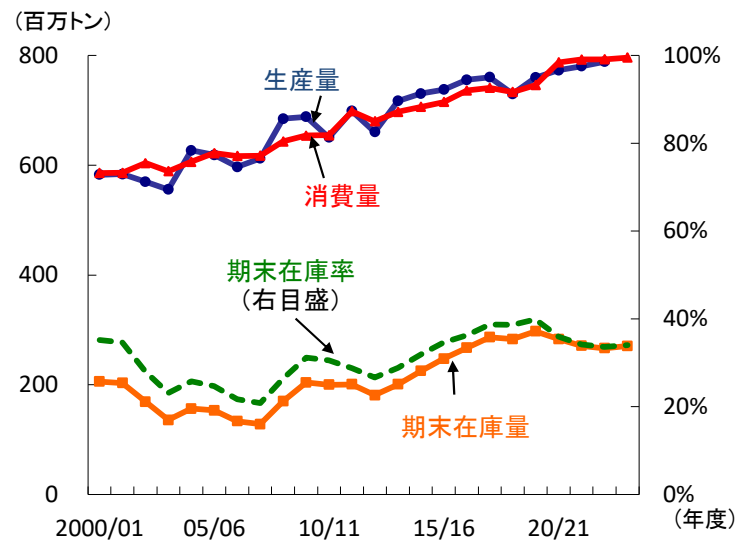
消費量 前年度比 前月比

- ・インドネシア等で下方修正されたものの、中国、ロシア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

- ・ロシア、EU、ウクライナで上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 前月比



資料:USDA「PS&D」(2023. 6. 9) をもとに農林水産省にて作成

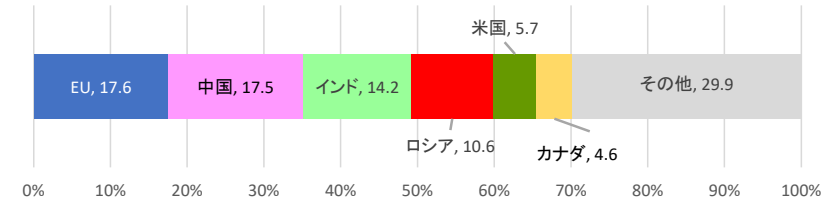
◎世界の小麦需給

(単位：百万トン)

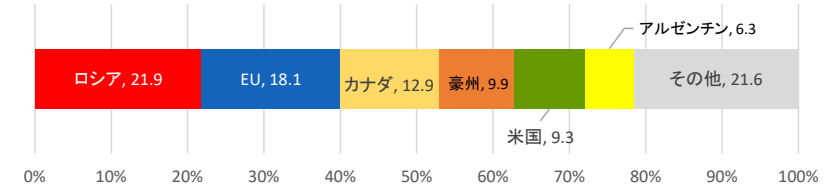
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	780.3	788.5	800.2	10.4	1.5
消 費 量	792.5	792.8	796.1	4.4	0.4
うち飼料用	161.0	156.1	154.8	3.9	▲ 0.8
輸 出 量	203.0	215.6	212.6	2.9	▲ 1.4
輸 入 量	199.4	208.9	209.5	2.0	0.3
期末在庫量	270.9	266.7	270.7	6.4	1.5
期末在庫率	34.2%	33.6%	34.0%	0.6	0.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (9 June 2023)

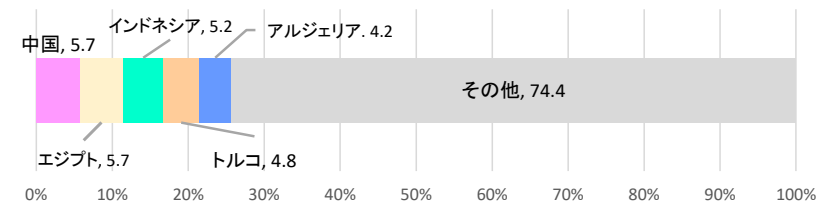
○ 2023/24年度の世界の小麦の生産量(800.2百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸出量(212.6百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸入量(209.5百万トン) (単位：%)



(2) 国別の小麦の需給動向

< 米国 > 2023/24 年度の生産量は前年度から 0.9%増加の 45.3 百万トン

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され 45.3 百万トンと、過去 5 年平均を 6.9%下回るものの、前年度に比べ 0.9%増加の見込み。

USDA の「Crop Production」(2023.6.9)によれば、冬小麦は前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、30.9 百万トンと前年度に比べ 3.0%増加したものの、春小麦及びデュラム小麦は前月予測からの変更はなく、合計で 14.4 百万トンと前年度に比べ 3.4%減少する見込み。

USDA の「Wheat Outlook」(2023.6.14)によれば、6 月 6 日現在、冬小麦の生産地の一部地域で 5 月に降雨があり厳しい干ばつが和らいだものの、約 50%が依然として干ばつ状況にあるため、主に西部で生産されているハード・レッド・ウインター(HRW)への影響が懸念されている。一方、東部で生産されているソフト・レッド・ウインター(SRW)の生育状況は全体としてはほぼ良好である。また、北部のホワイト小麦(WW)の生育状況は前年度に比べ劣るものの、高温乾燥となった 2021/22 年度に比べると良好である。

USDA の「Crop Progress」(2023.6.20)によれば、6 月 18 日時点で冬小麦の収穫が開始されているが、進捗率は 15%と前年度の 23%、過去 5 年平均の 20%を下回っている。また、作柄評価の「良～やや良」は 38%と前年度(30%)に比べ 8 ポイント増加したものの、主産地のカンザス州では 2 年続きの干ばつに見舞われ 16%と前年度(27%)を下回っている。また、春小麦は降雨等により播種が遅れたが、その後の乾燥天候により播種が進展した。6 月 18 日現在、発芽が進んでおり、主要生産 6 州の発芽進捗率は 98%と前年度(87%)、過去 5 年平均(96%)を上回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、19.7 百万トンと、主要輸出国に比べ価格競争力が劣ることから、前年度に比べ 6.4%減少し、1972/73 年度以降最低となる見込み。米国の輸出価格(FOB)は、世界の供給量が潤沢なことから、5 月 9 日時点の 373 ドル/トンから低下し、6 月 6 日時点で 353 ドル/トンとなったものの、主要輸出 6 か国の中ではアルゼンチン(378 ドル/トン)に次ぐ高い水準である。

なお、2022/23 年度の輸出は、価格競争力が引き続き弱く、2022 年 6 月から 2023 年 4 月までの間輸出量は 19.0 百万トンと、前年度同時期に比べ 5%下回っている。また、2023 年 5 月の輸出量は 119.8 万トン(前年度同時期 126.0 万トン)となり、輸出先国は、メキシコ(18.4%)、日本(12.3%)、タイ(11.1%)の順。

小麦一米国(冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

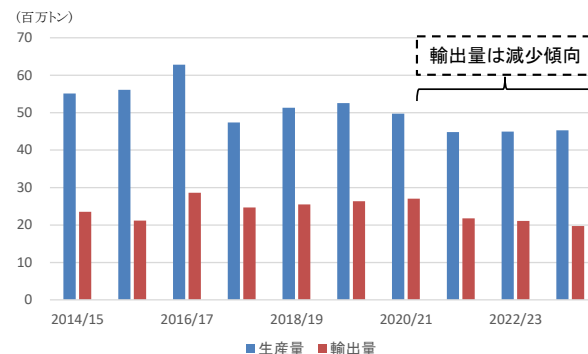
(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年6月～24年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	44.8	44.9	45.3	0.2	0.9
消 費 量	29.6	29.9	30.3	-	1.1
うち飼料用	1.6	1.5	1.9	-	27.3
輸 出 量	21.8	21.1	19.7	-	▲ 6.4
輸 入 量	2.6	3.4	3.7	-	7.9
期末在庫量	19.0	16.3	15.3	0.2	▲ 6.1
期末在庫率	37.0%	31.9%	30.6%	0.3	▲ 1.3

(参考)
収穫面積(百万ha) 15.03 14.36 15.01 - 4.5
単収(t/ha) 2.98 3.13 3.02 0.01 ▲ 3.5

資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(9 June 2023)

図:米国産小麦の生産量と輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2023.6.9)をもとに農林水産省で作成

図:米国産小麦の輸出量と輸出先国

(輸出量:万トン、シェア:%)

2023年 (2023年5月)			2022年 (2022年1月～12月)			2021年 (2021年1月～12月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
メキシコ	22.0	18.4	メキシコ	376.3	19.0	メキシコ	740.4	17.7
日本	14.7	12.3	フィリピン	228.4	11.5	フィリピン	505.2	12.1
タイ	13.3	11.1	日本	212.2	10.7	日本	435.1	10.4
エチオピア	12.0	10.0	韓国	122.1	6.2	韓国	293.3	7.0
ケニア	7.6	6.3	ナイジェリア	117.3	5.9	中国	289.9	6.9
フィリピン	7.1	5.9	台湾	82.1	4.1	ナイジェリア	272.0	6.5
エジプト	5.6	4.7	イエメン	70.8	3.6	台湾	178.7	4.3
その他	37.5	31.3	その他	775.2	39.1	その他	1,476.6	35.2
計	119.8	100.0	計	1,984.4	100.0	計	4,191.2	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Service Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2023/24 年度の小麦全体の生産量は前年度に比べ 5.7%増の 35.8 百万トン

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.6.20)によれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく 35.8 百万トンの見込み。

平年並みの天候となれば、他の穀物からのシフトによる播種面積の増加から、生産量は前年度に比べ 5.7%増加し、過去 5 年平均を 14.1%上回る見込み。品種別の生産量は、普通小麦が 29.9 百万トン(前年度比 5.5%増)、デュラム小麦が 5.8 百万トン(同 6.9%増)と、前年度に比べいずれも増加。

主産地の平原三州では、春小麦、デュラム小麦とも播種が進展しており、5 月 30 日現在、春小麦の播種はマニトバ州、アルバータ州でほぼ終了し、サスカチュワン州でも 91%の播種進捗率となった。また、デュラム小麦は 5 月に入り播種が進展し、5 月 30 日現在の播種進捗率はサスカチュワン州で 88%、アルバータ州で 99%となった。

カナダ各州政府によれば、①最大生産州であるサスカチュワン州では、6 月初旬に、一部で洪水が発生したものの、降雨により土壌水分が改善され、生産地の 78%(前週 69%)が適切な土壌水分量となった。②マニトバ州では、暴風雨が発生し、西部の一部で降雨過多となった。播種はほぼ終了していたものの、この降雨で一部の圃場では再播種が必要となる可能性がある。なお、中部・北部地域では、降水量は過去 30 年平均の 60%未満となっている。③アルバータ州では、土壌水分量の不足が生じており、州の中央部から北東部では高温乾燥が生育に影響する懸念がある。また、春小麦の生育状況を示す「やや良～良」の割合は 42%と前年度(80%)を大きく下回っている。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 24.8 百万トンと、前年度と比べ 1.2%増加する見込み。品種別の輸出量は、普通小麦が生産減となる豪州や黒海地域からの輸出が減少するとみられることを受け、20.0 百万トンと前年度に比べ 1.8%増加、一方、デュラム小麦は生育が良好なフランスとの競合が見込まれ、4.8 百万トンと同 0.4%減少する見込み。

なお、USDA によれば、2023/24 年度の小麦全体の輸出量増加の要因は、生産量の増加に加え、豪州の減産で競合が減少するアジア市場、特に中国やインドネシア向けの増加とされている。

また、AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 62.3%増加の 24.5 百万トン。4 月の輸出先国は、インドネシア(11.7%)、アルジェリア(10.0%)、中国(8.0%)の順。

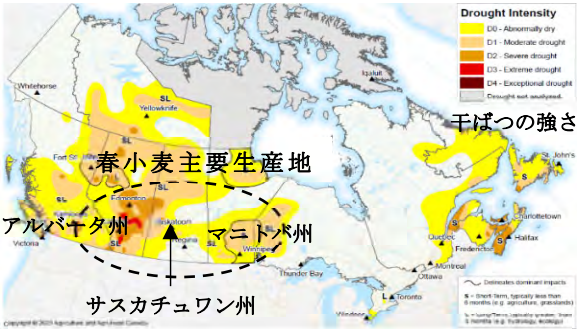
小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)			
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	22.4	33.8	37.0 (35.8)	-	9.4	
消 費 量	10.2	9.6	9.6 (9.3)	-	0.5	
うち飼料用	5.2	4.5	4.5 (4.9)	-	-	
輸 出 量	15.1	26.0	27.5 (24.8)	-	5.8	
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	-	
期末在庫量	3.7	2.5	3.0 (5.8)	-	19.7	
期末在庫率	14.5%	7.1%	8.2% (17.0%)	-	1.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.20	10.08	10.60 (10.70)	-	5.2	
単収(t/ha)	2.44	3.35	3.49 (3.34)	-	4.2	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(20 June 2023)

図 カナダの干ばつ状況(2023 年 5 月 31 日現在)



資料：AAFC 「Canadian Drought Monitor」

図 カナダ産小麦の輸出量、輸出先国

2022/23年度 (2023年4月)			2022/23年度 (2022年8月～2023年4月)			2021/22年度 (2021年8月～2022年4月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
インドネシア	28.0	11.7	中国	259.3	13.3	日本	132.3	12.7
アルジェリア	24.1	10.0	インドネシア	154.7	7.9	インドネシア	98.9	9.5
中国	19.3	8.0	日本	140.8	7.2	中国	68.9	6.6
日本	16.6	6.9	イタリア	132.4	6.8	コロンビア	67.7	6.5
メキシコ	16.3	6.8	バングラデシュ	122.5	6.3	ペルー	62.0	6.0
バングラデシュ	15.1	6.3	ペルー	118.6	6.1	米国	57.9	5.6
その他	120.5	50.2	その他	1,019.8	52.3	その他	551.1	53.1
計	239.9	100.0	計	1,948.1	100.0	計	1,038.8	100.0

資料：Canadian Grain Commission のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 豪州 ＞2023/24 年度の生産量は前年度比 25. 6%減の 29. 0 百万トン

【生育・生産状況】豪州農業資源経済科学局 (ABARES) 「Australian Crop Report」(2023.6.6)によれば、2023/24 年度の実産量は、収穫面積の減少(前年度比 1.6%減)と単収の低下(同 32.8%減)から 26.2 百万トンと、史上最高の前年度を 33.9%、過去 5 年平均(28.0 百万トン)をそれぞれ 6.4%下回る見込み。

2023/24 年度の天候は、年度後半にエルニーニョ現象等が発生し、降水量は冬、春ともに平均を下回る可能性がある。この乾燥天候となる予想から、比較的地域に強い大麦へ作付けがシフトすること等により、小麦の播種面積は 12.8 百万ヘクタールと前年度から 2 %減少する見込み。なお、播種は 4 月より開始され、5 月末時点で播種進捗率は 90%を超えた。

主要生産州では、ウェスタンオーストラリア州(WA 州)の実産量は、播種面積が前年度から 2 %減少(4.65 百万ヘクタール)し、単収も乾燥天候により減少することから 9.5 百万トンと、前年度に比べ 32%減少する見込み。なお、播種時の土壌水分は、州中央部では秋の降雨で十分であった一方、北部と南部でかなり少なかったことから今後十分な降雨が必要とされている。また、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)の実産量は、乾燥天候による単収の低下と播種面積の減少から、7.2 百万トンと前年度に比べ 30%減少の見込み。播種面積は、比較的地域な小麦価格や乾燥に比較的地域強い大麦の作付けへのシフト等から、3.51 百万ヘクタール(前年度比 3 %減)の見込み。なお、土壌水分量は、特に北部で 3 月と 4 月に降雨に恵まれ深層の土壌水分が十分となったものの、5 月には平均を下回る降水量となり減少している。

GIWA(ウェスタンオーストラリア州穀物団体)(2023.6.9)によれば、播種面積は前月予測から上方修正され 4.63 百万ヘクタールとなるものの、前年度同時期(4.89 百万ヘクタール)に比べ 4.7%減少見込み。

【貿易情報・その他】ABARES によれば、2023/24 年度の輸出量は 21 百万トンと前年度に比べ 29%減少する見込み。この輸出量減少のため、豪州の伝統的な市場であったインドネシア、タイ、ベトナム等では、豪州産から生産量の回復したアルゼンチン産にシフトする可能性がある。なお、豪州は、地理的にアジア市場に近く他の主要輸出国と比べて輸送コストが低いと、南アジアや東アジアからの飼料用途を含めた需要が堅調であることから、過去 10 年平均を 15%上回る見込み。

また、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 31.0 百万と、中国やアジア諸国の需要から前年度を 12.7%上回る見込み。2023 年 4 月の輸出量は 301.0 万トンと前年度同期を 17.1%上回る。輸先国は、中国(32.8%)、タイ(11.0%)、インドネシア(10.0%)の順。

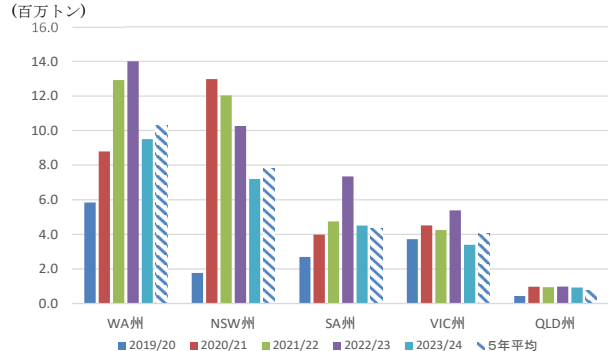
小麦一豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	36.2	39.0	29.0	(27.9)	-	▲ 25.6
消 費 量	8.5	8.5	8.0	(8.2)	-	▲ 5.9
うち飼料用	5.0	5.0	4.5	(4.5)	-	▲ 10.0
輸 出 量	27.5	31.0	21.0	(21.0)	-	▲ 32.3
輸 入 量	0.2	0.2	0.2	(0.3)	-	-
期末在庫量	3.5	3.2	3.4	(1.7)	-	6.3
期末在庫率	9.6%	8.0%	11.6%	(6.0%)	-	3.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	12.73	13.00	12.50	(12.4)	-	▲ 3.8
単収(t/ha)	2.85	3.00	2.32	(2.25)	-	▲ 22.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
IGC 「Grain Market Report」(18 May 2023)

図：豪州の州別の生産量の推移



資料:ABARES 「Australian Crop Report」(2023.6.6)をもとに農林水産省で作成

図：豪州産小麦の輸出量と輸出先国

(万トン)

2023年4月			2023年1月～2023年4月			2022年1月～2022年4月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
中国	98.6	32.8	中国	377.1	28.8	中国	221.0	21.2
タイ	33.1	11.0	インドネシア	138.3	10.6	フィリピン	133.5	12.8
インドネシア	30.0	10.0	ベトナム	116.2	8.9	インドネシア	127.7	12.3
韓国	26.8	8.9	タイ	111.1	8.5	ベトナム	99.9	9.6
ベトナム	26.0	8.6	韓国	110.3	8.4	韓国	76.3	7.3
フィリピン	20.0	6.6	フィリピン	102.8	7.9	マレーシア	37.5	3.6
その他	66.5	22.1	その他	353.7	27.0	その他	346.0	33.2
計	301.0	100.0	計	1,309.5	100.0	計	1,041.9	100.0

資料:豪州統計局

< EU27 > ウクライナ産小麦の輸入規制は9月15日までに段階的に廃止

【生育・生産状況】欧州委員会(2023.5.26)によれば、2023/24年度のEU27の生産量は、前月予測から0.5百万トン上方修正され、前年度に比べ4.6%増加の140.0百万トンの見込み。そのうち、普通小麦は前月予測から0.6百万トン上方修正され132.6百万トンと、前年度に比べ4.7%増加する見込み。また、デュラム小麦はわずかに下方修正され7.4百万トンとなるものの、同4.2%増加する見込み。国別では、普通小麦は干ばつによりスペイン等で減少するものの、天候に恵まれたフランス、スロバキアで増加し、また、デュラム小麦はスペイン等で減少するものの、フランス、ギリシャ等で増加する見込み。

主要生産国の天候、生育状況は、フランス、ドイツ、ポーランドでは気温が概ね平年並みで、生育に適した天候となった。一方、厳しい干ばつとなっていたスペインの主要産地では、5月下旬から6月上旬にかけて降雨があったものの、生育の回復には遅すぎた。なお、フランスアグリメールによれば、生育状況の評価を示す「とても良い～良い」の状態は、6月5日時点で、普通小麦は88%と前月の93%より低下したものの、前年度同期66%を上回っている。デュラム小麦は82%と前月の87%を下回ったものの、前年度同期73%を上回っている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸入量は、小麦や他の飼料用穀物の生産量の増加から7.0百万トンと、前年度に比べ39.1%減少する見込み。なお、2022/23年度の輸入は、高温乾燥で減産となったとうもろこしの代替としてウクライナ産小麦の輸入が増加している(右図参照)。

2023/24年度の輸出量は、生産量の上方修正により前月予測から0.5百万トン上方修正され38.5百万トンと、前年度に比べ11.6%増加する見込み。また、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、34.5百万トンの見込み。欧州委員会によれば、2023年3月の輸出量は244.4万トンと前月に比べ増加したものの、5年平均(265.1万トン)を下回っている。輸出先国は、普通小麦がアルジェリア(22.3%)、モロッコ(20.5%)の順で、特に、干ばつが発生しているアルジェリアへの輸出量が増加する可能性がある。また、デュラム小麦は、タンザニア(53.8%)、モーリタニア(9.0%)、トルコ(7.5%)の順。

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題に関し、欧州委員会は、2023年4月28日、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニアでのウクライナ産穀物の過剰供給緩和を目的に、5月2日から6月5日までの間ウクライナ産の小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種子の輸入に規制を設定した。その後、6月5日に2023年9月15日までに段階的に規制を廃止することを決定。

小麦—EU27 (冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	138.2	134.3	140.5 (136.8)	1.5	4.6	
消費量	108.3	108.0	109.5 (107.7)	-	1.4	
うち飼料用	45.0	44.0	45.0 (43.0)	-	2.3	
輸出量	32.0	34.5	38.5 (36.3)	0.5	11.6	
輸入量	4.6	11.5	7.0 (5.9)	-	▲ 39.1	
期末在庫量	13.3	16.7	16.2 (17.7)	1.5	▲ 3.0	
期末在庫率	9.5%	11.7%	10.9% (12.3%)	1.0	▲ 0.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	24.28	24.35	24.43 (24.10)	-	0.3	
単収(t/ha)	5.69	5.52	5.75 (5.68)	0.06	4.2	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
IGC 「Grain Market Report」(18 May 2023)

図 EU27 の小麦輸入量の推移

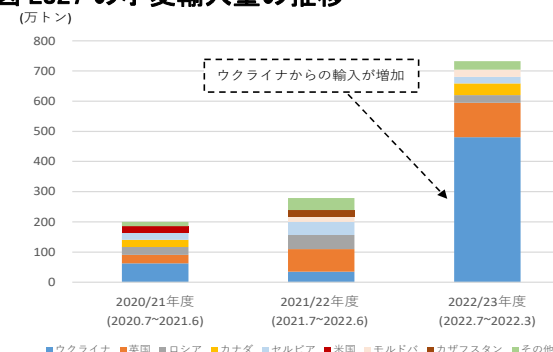
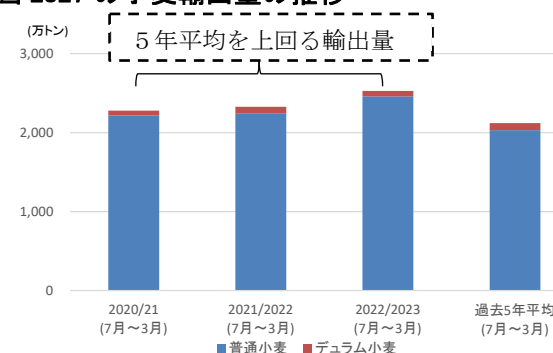


図 EU27 の小麦輸出量の推移



資料: EU 委員会 Cereals exports and imports 2023.5.22)をもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の輸入量は、豪雨の影響から 1.5 百万トン上方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月からの変更はなく、前年度に比べ 1.7% 増加の 140.0 百万トンと史上最高となる見込み。農薬、肥料代等の生産コストが増加の一方、価格水準が高く、高い収益性が見込みから、作付け意欲が高まり前年度に比べ生産量は増加した。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 4 月号」によれば、北部の生産地のほとんどで気温が比較的高く、土壌水分も十分であった。一方、主要産地の河南省等では、5 月後半に豪雨があり、成熟期～収穫期にある冬小麦の品質が低下した。

中国農業農村部によれば、中国全土で冬小麦の収穫は順調に進み、収穫進捗率は 90% 以上となった。なお、江蘇省の一部地域では、降雨により小麦の収穫時の水分量が高くなったため、保管状況による品質への影響が懸念されている。主要産地の冬小麦の生育状況は、1 類苗と 2 類苗の割合がそれぞれ 88.7%、4.9% で、前年同期並みとなっている。（※1 類苗は生育が正常な苗。2 類苗は通常よりやや小さい苗）

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、豪雨により飼料用グレード小麦の供給が増加し、不足する食用は輸入で充当されるため、前月予測から 2.0 百万トン上方修正され 151.0 百万トンと、前年度に比べ 2.0% 増加。

2023/24 年度の輸入量は、豪雨による品質低下で減少した製粉用グレードの輸入需要が増加することから、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、12.0 百万トンの見込み。このため、中国の主な輸入小麦は、前年度の飼料用から製粉用にシフトするとみられる。なお、世界に占める中国の輸入量割合は 5.7% となり、2 年連続の世界第 1 位となる見込み。

2022/23 年度の輸入量は、特に、豪州、カナダからの輸入が継続していることから、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、14.0 百万トンと、1992/93 年度以降で最高となる見込み。2023 年 1 月から同年 4 月までの輸入量は 603.3 万トンと、前年同時期を 60.9% 上回っている。この間の輸入先国のシェアは、豪州が 59.6%、カナダが 18.3%、フランスが 12.8% であり、この 3 か国で 90.7% を占めている。なお、輸入先国の豪州は降雨により飼料用グレードの小麦が増加し、輸出余力が増加した。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 4 月号」によれば、政府備蓄の放出(新穀、旧穀の切替え)や、目前に迫った新穀小麦の市場への流入、小麦粉の消費低迷などの影響を受け、小麦価格は下落した。小麦価格の低下に伴い、飼料用としての小麦への需要の動きも徐々に出てくる見込み。

小麦—中国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23 年 7 月～24 年 6 月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	137.0	137.7	140.0 (139.0)	-	1.7	
消 費 量	148.0	148.0	151.0 (142.3)	2.0	2.0	
うち飼料用	35.0	33.0	34.0 (26.0)	2.0	3.0	
輸 出 量	0.9	0.9	0.9 (1.1)	-	-	
輸 入 量	9.6	14.0	12.0 (7.7)	1.5	▲ 14.3	
期末在庫量	136.8	139.6	139.7 (143.5)	-	0.1	
期末在庫率	91.9%	93.7%	92.0% (100.1%)	▲ 1.2	▲ 1.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.57	23.52	23.60 (23.7)	-	0.3	
単収(t/ha)	5.81	5.86	5.93 (5.86)	-	1.2	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
IGC 「Grain Market Report」(18 May 2023)

図 中国の小麦輸入量の推移

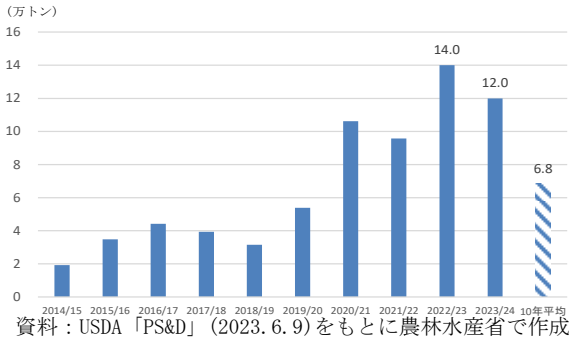


図 中国産の小麦の輸入量と輸入先国

2023年4月			2023年1月～2023年4月			2022年1月～2022年4月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	106.6	63.3	豪州	359.8	59.6	豪州	209.1	55.8
カナダ	31.9	18.9	カナダ	110.2	18.3	フランス	133.2	35.5
米国	27.1	16.1	フランス	77.5	12.8	カナダ	30.0	8.0
カザフスタン	1.2	0.7	米国	47.5	7.9	カザフスタン	1.0	0.3
ロシア	0.9	0.5	カザフスタン	3.1	0.5	ロシア	0.7	0.2
ベトナム	0.4	0.3	ロシア	2.8	0.5	日本	0.7	0.2
その他	0.4	0.2	その他	2.5	0.4	その他	0.2	0.0
計	168.4	100.0	計	603.3	100.0	計	375.0	100.0

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2023/24 年度の輸出量は史上最高の 46.5 百万トンとなる見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測から 3.5 百万トン上方修正され 85.0 百万トンの見込み。播種期の降雨過多による収穫面積の減少と単収の低下から、生産量は史上最高の前年度(92.0 百万トン)に比べ 7.6%減少するものの、過去 5 年平均(79.6 百万トン)を 6.8%上回る見込み。作期別生産量は、冬小麦は、春の降雨に恵まれたため、前月予測から 3.5 百万トン上方修正され 61.5 百万トンと増加するものの、前年度に比べ 9.6%減少する見込み。また、春小麦は前月予測からの変更はなく、23.5 百万トンと同 2.1%減少する見込み。

ロシア農業省によれば、2023/24 年度の春小麦の播種はほぼ終了。播種面積は、6 月 9 日時点で、13.66 百万ヘクタール(前年度同期比 9.1%増)と播種予定面積(13.01 百万ヘクタール)を上回った。

ロシア気象センターによれば、生育状況は、①ヨーロッパ部北部の中央連邦管区等では、冬小麦の出穂が始まり、春小麦は子葉形成期から分けつ期に入った。②同南部の南連邦管区等では、土壤水分に概ね不足はなく、冬小麦は出穂期から開花期、春小麦は概ね茎たち期に入っている。③アジア部のウラル連邦管区やシベリア連邦管区の西シベリア地域では、冬小麦が概ね茎たち期に入り、春小麦の播種作業が開始された。なお、春小麦の 40.4%がシベリア連邦管区で栽培されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、生産量の上方修正による輸出余力の増加から、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、史上最高の 46.5 百万トンの見込み。また、前年度に比べ、豊富な期首在庫量により輸出余力が大きいことから、輸出量は 4.5%増加の見込み。

2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 44.5 百万トンと、前年度に比べ 34.8%増加。

現地情報会社によれば、旧来の輸出先である中東、アフリカ諸国向けの輸出量は、ウクライナ侵攻前後の比較では、国ごとで増減があるものの大きな変化はみられない。また、2023 年 5 月の輸出量は、前月に比べ 29.5%減少するものの、同月の過去 3 年平均(117.7 万トン)を上回る 323.6 万トンと水準は高い。輸出先国は、トルコ(26.1%)、エジプト(12.9%)、イエメン(8.4%)の順。

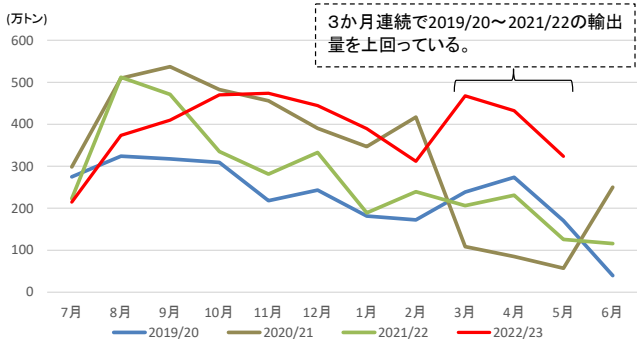
なお、2023 年 5 月 27 日、ロシア政府が輸出関税算定の基準価格を改定し、6 月以降関税額が引き下げられている。穀物の輸出関税は輸出業者から生産者に転嫁されているため、在庫過多で穀物価格が低迷する中、転嫁を減らして生産者を支援することが目的と説明されている。USDA によれば、ロシア産小麦の輸出価格(FOB)は、6 月 6 日時点で、227 ドル/トンと主要小麦輸出国の中で最も低い。

小麦一口ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	75.2	92.0	85.0 (83.6)	3.5	▲ 7.6
消 費 量	41.8	42.3	42.0 (45.1)	1.0	▲ 0.6
うち飼料用	18.5	19.0	19.0 (20.0)	1.0	-
輸 出 量	33.0	44.5	46.5 (43.7)	1.0	4.5
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.2)	-	-
期末在庫量	12.1	17.6	14.4 (11.6)	1.5	▲ 18.1
期末在庫率	16.2%	20.3%	16.3% (13.1%)	1.4	▲ 4.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	27.63	29.00	27.50 (27.8)	-	▲ 5.2
単収(t/ha)	2.72	3.17	3.09 (3.01)	0.13	▲ 2.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
IGC 「Grain Market Report」(18 May 2023)

図：ロシアの小麦輸出量の推移(2019/20～2022/23)



表：ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2023年5月)		
国 名	輸出量	シェア
トルコ	84.6	26.1
エジプト	41.8	12.9
イエメン	27.2	8.4
サウジアラビア	20.4	6.3
不明	18.9	5.8
リビア	16.5	5.1
アルジェリア	14.3	4.4
その他	99.9	30.9
計	323.6	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2023/24 年度の輸出量は 10.5 百万トンと前年度比 34.4%減少の見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、ロシアによる侵攻により、2013/14年度以降で最低の17.5百万トンと、前年度(20.9百万トン)に比べ16.3%減少、過去5年平均(26.7百万トン)に比べ38.2%減少する見込み。なお、ウクライナ南部での良好な天候を受け単収が引き上げられたことから、前月予測から1.0百万トン上方修正された。

なお、ウクライナ穀物協会の試算によれば、6月2日時点で、2023/24年度の生産量は前年度(20.2百万トン)から11.4%減少の17.9百万トンの見込み。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量(「黒海穀物イニシアチブ」と陸路とEUの港湾を利用した「連帯レーン」)は、前年度に比べ、ロシアの侵攻による港湾の閉鎖や、生産減による輸出余力の低下から10.5百万トンと、前年度に比べ34.4%減少する見込み。なお、生産量の引上げにより、前月予測から0.5百万トン上方修正された。また、2022/23年度の輸出量は、前月予測から1.0百万トン上方修正され16.0百万トンと、前年度に比べ15.1%の減少に留まっている。

ウクライナ政府等によれば、2022/23年度のうち2022年7月～2023年5月の輸出量は1,551.5万トン(海上輸送、陸路等での全ての輸出が含まれる)。また、輸出先国は、トルコ(24.6%)、スペイン(20.4%)の順。ロシアのウクライナ侵攻後、ルーマニア、スペイン、ポーランド等の一部のEU諸国向けが増加した。また、「国連共同調整センター」によれば、合意に基づく5月の輸出量は35.8万トンで、前月に比べ、穀物輸送船舶の検査官不足等から55.4%減少した(8月からの月平均は83.9万トン)。なお、トルコは輸入関税賦課により前月から減少。また、2022年8月から2023年5月までの黒海港湾からの小麦輸出量は838.6万トンで、輸出先国は、スペイン(26.5%)、トルコ(17.2%)の順。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、2023年3月19日に再延長され、その期限である5月17日に再び60日間延長(7月中旬まで)された。また、ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題について、欧州委員会は、4月28日、ポーランド等5か国に5月2日から6月5日までの間のウクライナ産小麦等の輸入規制(トランジットは除く)を設定。その後、6月5日に2023年9月15日までに規制を段階的に廃止することを決定。

6月6日、カホフカ水力発電所のダム決壊により、ヘルソン州の農地が浸水した。USDAによれば、全体の6%を占めるヘルソン州の小麦生産量に与える影響は、現時点では限定的とみられている。

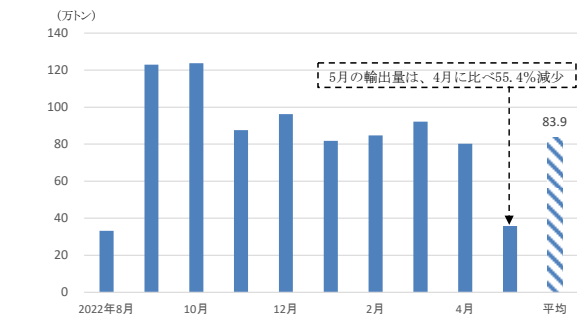
小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	33.0	20.9	17.5 (20.2)	1.0	▲ 16.3	
消費量	10.5	8.5	7.1 (11.6)	-	▲ 16.5	
うち飼料用	4.5	3.5	2.5 (2.6)	-	▲ 28.6	
輸出量	18.8	16.0	10.5 (11.0)	0.5	▲ 34.4	
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-	
期末在庫量	5.3	1.7	1.7 (1.7)	▲ 0.0	▲ 2.3	
期末在庫率	18.0%	7.1%	9.6% (7.4%)	▲ 0.3	2.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.41	5.30	4.30 (5.7)	-	▲ 18.9	
単収(t/ha)	4.45	3.94	4.07 (3.57)	0.23	3.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
IGC 「Grain Market Report」(18 May 2023)

図：黒海穀物イニシアチブによる小麦の輸出量の推移



資料：国連・黒海イニシアチブ共同センター(2023.6.4)のデータをもとに農林水産省で作成

図：ウクライナ産小麦の輸出量、輸出先国

2022/23年度 (2023年5月)			2022/23年度 (2023年7月～2023年5月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年2月※)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	27.4	24.7	トルコ	334.5	21.6	エジプト	273.8	15.1
スペイン	22.6	20.4	ルーマニア	249.0	16.0	インドネシア	265.5	14.7
ルーマニア	14.8	13.3	スペイン	234.5	15.1	トルコ	178.7	9.9
エジプト	11.4	10.3	バングラデシュ	98.3	6.3	パキスタン	146.9	8.1
バングラデシュ	10.7	9.6	ポーランド	87.6	5.6	サウジアラビア	75.1	4.1
イタリア	6.3	5.7	エジプト	61.9	4.0	イエメン	64.7	3.6
レバノン	2.6	2.3	イタリア	58.0	3.7	バングラデシュ	63.2	3.5
その他	15.2	13.7	その他	427.7	27.6	その他	743.4	41.0
計	111.0	100.0	計	1,551.5	100.0	計	1,811.3	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成
※2022年3月から2022年6月までの輸出データはロシアのウクライナ侵攻により不明

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。

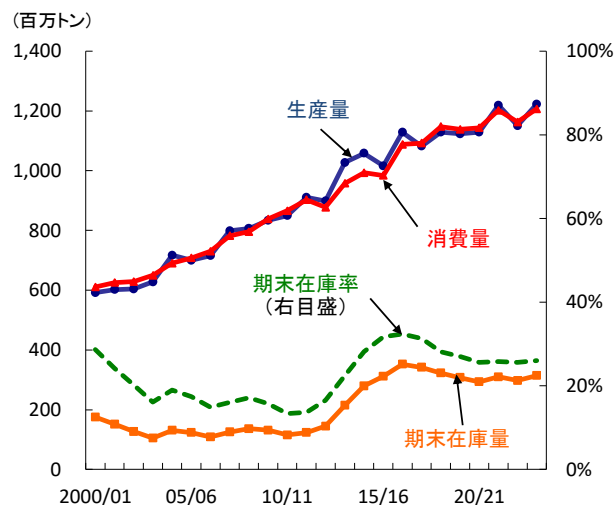
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ウクライナで上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」（2023.6.9）をもとに農林水産省にて作成

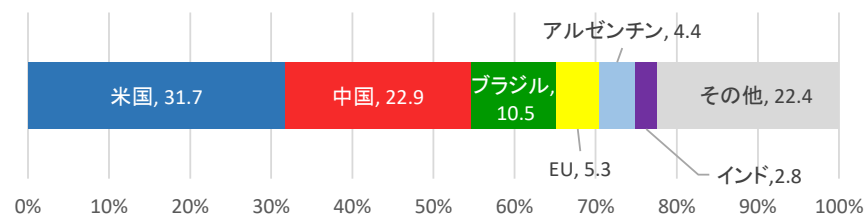
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

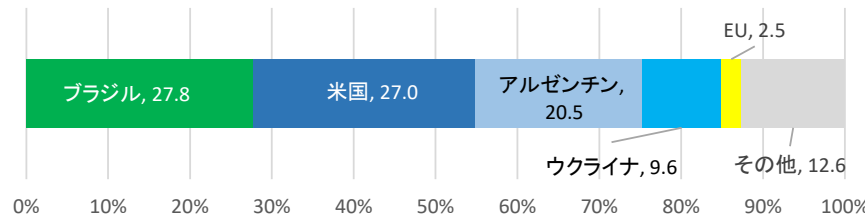
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,218.7	1,150.7	1,222.8	3.1	6.3
消費量	1,201.9	1,163.1	1,206.4	2.2	3.7
うち飼料用	746.0	730.9	760.8	2.2	4.1
輸出量	206.5	176.6	197.8	2.5	12.0
輸入量	184.5	175.0	187.0	2.5	6.8
期末在庫量	309.9	297.6	314.0	1.1	5.5
期末在庫率	25.8%	25.6%	26.0%	0.0	0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（9 June 2023）

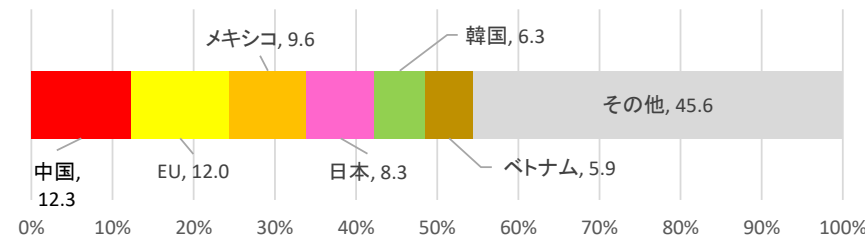
○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,222.8 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸出量(197.8 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸入量(187.0 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 中西部の乾燥の影響で、作柄評価は前年同時期を下回る

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収及び収穫面積が増加することを受け、前年度より11.2%増の387.8百万トンで史上最高の見通し。

USDA「Crop Progress」（2023.6.20）によれば、作付けは概ね終了し、6月18日現在で発芽率は96%となっており、前年同時期（94%）、過去5年平均（94%）をいずれも上回っている。作柄評価が「良～やや良」の比率は55%であり、6月中旬の乾燥の影響で前週（61%）から引き下げられ、前年同時期（70%）も下回っている。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用及びエタノール用等の需要の増加により、前年度に比べ3.6%増の314.6百万トンの見通し。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、増産に伴う国際的なとうもろこし価格の低下による輸出の回復期待から、前年度より21.7%増の53.3百万トンの見込み。2023/24年度の世界最大の輸入国になると見込まれる中国への輸出を巡って、ブラジル産、ウクライナ産との輸出競争が激化する見通し。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.6.9）によれば、本年6月の米国産の輸出価格は、中西部のコーンベルトでの乾燥した天候を受け、前月からわずかに上昇した。また、2023年輸出量（1月1日～5月25日）は19.0百万トンで、内訳はメキシコ（6.1百万トン）、日本（3.9百万トン）、中国（2.9百万トン）の順である。中国向け輸出成約のキャンセル等で、輸出量は前年同時期（30.2百万トン）に比べて38%減と低調なペースで推移している。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、低調な輸出ペースから2022/23年の輸出量が下方修正されたため、前月予測から0.9百万トン上方修正され、前年度より55.5%増の56.4百万トンの見込み。期末在庫率は15.6%で、前年度より上昇し、2018/19年度（15.5%）以来の高水準となる見込み。

とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

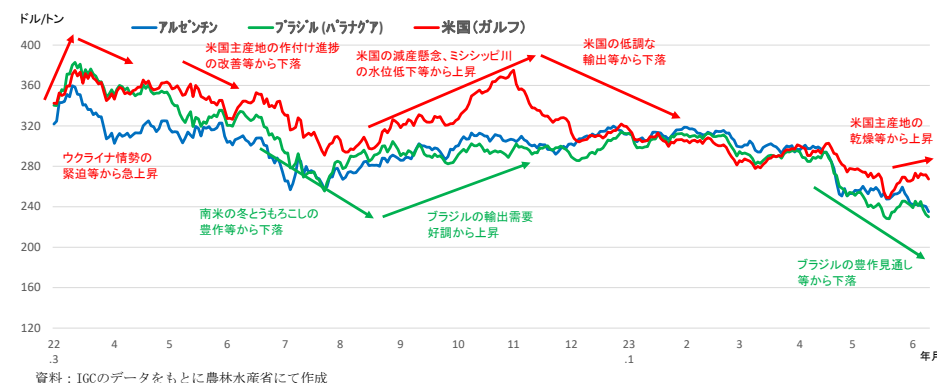
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年9月～24年8月）		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	382.9	348.8	387.8	-	11.2
消費量	317.1	303.7	314.6	-	3.6
うち飼料用	145.3	134.0	143.5	-	7.1
エタノール用等	135.3	133.4	134.6	-	1.0
輸出量	62.8	43.8	53.3	-	21.7
輸入量	0.6	0.6	0.6	-	-
期末在庫量	35.0	36.9	57.3	0.9	55.5
期末在庫率	9.2%	10.6%	15.6%	0.2	5.0

（参考）

収穫面積(百万ha)	34.53	32.05	34.03	-	6.2
単収(t/ha)	11.09	10.88	11.39	-	4.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（9 June 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



＜ ブラジル ＞ 2022/23 年度の冬とうもろこしの収穫に遅れ

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降に作付けが開始される 2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 2.3%減の 129.0 百万トンの見通し。

ブラジル食料供給公社 (CONAB) 月例報告 (2023.6.13) によれば、収穫中の 2022/23 年度の夏とうもろこしの生産量は、前年度比 8.2%増の 27.1 百万トンの見込み。大豆収穫後の 2 月以降に作付けされた冬とうもろこしの生産量は、前年度比 12.0%増の 98.6 百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比 11.1%増の 125.7 百万トンで史上最高の見込み。(P.23 大豆－ブラジルのクロップカレンダー参照)。

CONAB 月報報告 (2023.6.13) によれば、2022/23 年度の夏とうもろこしの収穫進捗率は 83.4%であり、収穫が完了していた前年度同時期より遅れているものの、収穫作業は終盤を迎えている。主要生産州であるリオ・グランデ・ド・スール州の収穫進捗率は 95%。2022/23 年度の単収は、前年度より 11.1%増の 6.1 トン/ヘクタールの見込み。

冬とうもろこしについては、USDA によれば、主要生産州であるマツト・グロッソ州、パラナ州では 5 月下旬から 6 月上旬にかけて降雨に恵まれ、作柄は良い。6 月 16 日現在、マツト・グロッソ州の収穫進捗率は 8 %と、前年度同期 (26%) を下回っている。現地情報によると、降雨後、粒が完全に乾燥するのを待つ必要があり、収穫進捗率が低くなっている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、加工用及び飼料用需要の増加等から、前年度より 3.4%増の 76.5 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から引き続き高水準の生産量と安価な輸出価格から、前年度より 3.8%増の 55.0 百万トンで史上最高となり、2 年連続で世界第 1 位の輸出国となる見込み (右図参照)。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1～5 月の輸出量は 10.6 百万トンで、前年度比 2.0 倍。内訳は、日本 (1.8 百万トン)、中国 (1.2 百万トン)、韓国 (1.2 百万トン) の順。前年 11 月末以降開始された中国向け輸出は、大豆の輸出が一巡し、輸送や港湾の輸出キャンペーンに余裕が出てくる本年後半以降、冬とうもろこしの収穫を受け本格化の見通し。

とうもろこし－ブラジル

(大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約 8 割、夏とうもろこしは約 2 割)

(単位: 百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年3月～25年2月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)	
生 産 量	116.0	132.0	129.0 (130.2)	－	▲ 2.3	
消 費 量	70.5	74.0	76.5 (79.2)	－	3.4	
うち飼料用	59.5	61.5	62.5 (54.3)	－	1.6	
輸 出 量	48.3	55.0	55.0 (51.0)	－	－	
輸 入 量	2.6	1.0	1.2 (0.5)	－	20.0	
期末在庫量	4.0	8.0	6.7 (7.5)	－	▲ 16.3	
期末在庫率	3.3%	6.2%	5.1% (5.8%)	－	▲ 1.1	

(参考)

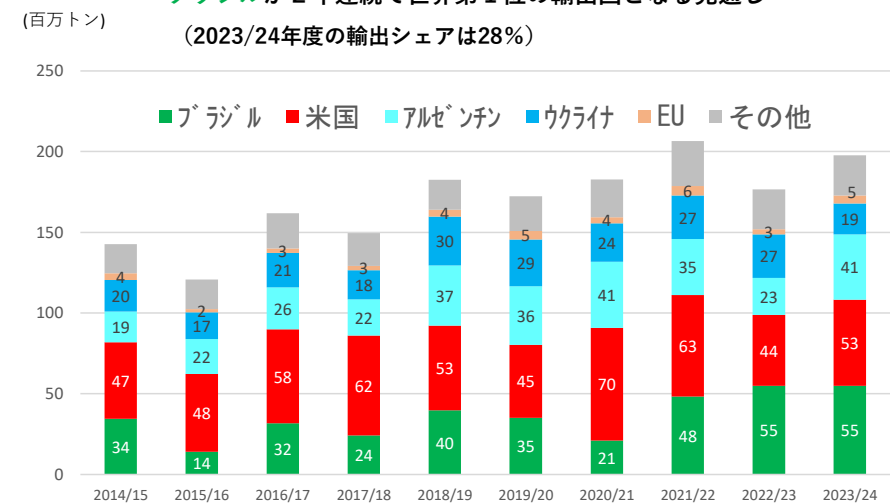
収穫面積(百万ha)	21.80	22.70	22.90 (22.30)	－	0.9
単収 (t/ha)	5.32	5.81	5.63 (5.84)	－	▲ 3.1

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
IGC 「Grain Market Report」(18 May 2023)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移

ブラジルが 2 年連続で世界第 1 位の輸出国となる見通し

(2023/24 年度の輸出シェアは 28%)



資料: USDA 「PS&D」 (2023. 6. 9) のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により生産量が激減した前年度から 54.3%増の 54.0 百万トンで史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報(2023.6.15)によれば、2022/23 年度の実穫進捗率は 37.5%と、前年度同期(37.0%)を上回っているもの、過去 5 年平均(49.1%)を下回っている。生産量は、ブエノスアイレス州等主産地で長引く乾燥の影響で 36.0 百万トンとなり、過去 5 年平均(51.0 百万トン)を 29%下回る見込み。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い需給が緩和し、飼料用需要が回復することから、前年度より 12.5%増の 13.5 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により減産した前年度から生産量が回復し、輸出量も回復する見通しから、前年度より 76.1%増の 40.5 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1～4 月の輸出量は 6.4 百万トンで、2022/23 年度産が減産したため、前年度同期(11.0 百万トン)比で 42%減。内訳は、マレーシア(77.6 万トン)、ベトナム(74.0 万トン)、ペルー(72.7 万トン)の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。2023 年 6 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンに設定されている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形を発行するなどの救済施策を公表した。4 月 10 日には、各種税の支払い猶予措置などの救済施策を公表した。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位: 百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年3月～25年2月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	49.5	35.0	54.0 (61.0)	-	54.3	
消 費 量	14.5	12.0	13.5 (20.4)	-	12.5	
うち飼料用	10.5	8.0	9.3 (15.5)	-	16.3	
輸 出 量	34.7	23.0	40.5 (40.9)	-	76.1	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.4)	-	-	
期末在庫量	1.5	1.5	1.5 (4.8)	-	-	
期末在庫率	3.0%	4.3%	2.8% (7.8%)	-	▲ 1.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.10	6.70	7.00 (8.20)	-	4.5	
単収(t/ha)	6.97	5.22	7.71 (7.44)	-	47.7	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
IGC「Grain Market Report」(18 May 2023)

写真: 北部サンタフェ州の遅植えとうもろこしの圃場風景 (6月4日撮影)

本圃場は、干ばつ被害に加え、鳥獣被害に遭った。
収穫作業は7月～8月を予定。



< 中国 > 2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高、輸入量増加の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、大豆の増産政策により作付けが大豆にシフトすることから、とうもろこしの作付面積がわずかに減少するものの、主産地における単収の増加が見込まれることから、前年度より 1.0%増の 280.0 百万トンで史上最高の見込み。

6 月上旬現在、春とうもろこしは、主産地の黒竜江省等で発芽期から初期生育期を迎えている。5 月末までは降雨が少なかったが、6 月上旬に降雨に恵まれ、おおむね順調に生育しているとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、国際的なとうもろこし価格の低下と国内の経済成長を背景とした飼料用需要の増加から、前年度より 1.7%増の 304.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の飼料用需要の増加を背景として、国際価格が国内価格より低下したことを受け、米国、ウクライナに加え、前年から開始されたブラジルからの輸入が増加すると予想されており、前年度より 27.8%増の 23.0 百万トンの見込み。

農業農村部によれば、2023 年 1 月～4 月計の輸入量は、前年同期より 8.4%減の 852 万 4 千トン。内訳は、ウクライナ (290.2 万トン)、米国 (289.8 万トン)、ブラジル (221.5 万トン) の順。2023 年 4 月、米国産の輸入量が前月より大きく減少しており、業界関係者によると、米国産が他国産に比べて割高であることから輸入を取り止める動きがあったとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 4 月号」によると、4 月の国内価格は、養豚業者及びでんぷん加工業者が経営マージンの悪化等から買付けに消極的となったほか、アルコール企業は加工の閑散期に入ったため、2,880 元/トンと前月 (2,940 元/トン) から下落した。また、4 月の輸入価格は、2,700 元/トンと前月 (2,660 元/トン) から上昇した。2022 年 12 月以降、国内価格が国際価格より高い状況が続いている。

とうもろこし—中国

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	272.6	277.2	280.0	(279.4)	-	1.0
消 費 量	291.0	299.0	304.0	(310.5)	-	1.7
うち飼料用	209.0	218.0	223.0	(210.0)	-	2.3
輸 出 量	0.0	0.0	0.0	(0.1)	-	-
輸 入 量	21.9	18.0	23.0	(25.0)	-	27.8
期末在庫量	209.1	205.3	204.3	(169.9)	-	▲ 0.5
期末在庫率	71.9%	68.7%	67.2%	(54.7%)	-	▲ 1.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	43.32	43.07	43.00	(43.00)	-	▲ 0.2
単収(t/ha)	6.29	6.44	6.51	(6.50)	-	1.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
IGC 「Grain Market Report」(18 May 2023)

表：中国のとうもろこし輸入量と輸入先国

(輸入量：万トン、シェア：%)

2023年4月			2023年 1 月～2023年 4 月			2022年 1 月～2022年 4 月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ウクライナ	81.6	81.4	ウクライナ	290.2	34.0	ウクライナ	469.7	50.5
米国	5.3	5.3	米国	289.8	34.0	米国	446.6	48.0
ブラジル	5.2	5.2	ブラジル	221.5	26.0	ブルガリア	4.9	0.5
ブルガリア	4.9	4.9	ロシア	18.3	2.1	ミャンマー	4.8	0.5
ロシア	1.9	1.9	ミャンマー	16.6	1.9	ラオス	2.3	0.3
ミャンマー	1.3	1.3	ブルガリア	14.7	1.7	ロシア	2.1	0.2
その他	0.1	0.0	その他	1.2	0.1	その他	0.3	0.0
計	100.3	100	計	852.4	100	計	930.7	100

資料：農業農村部資料より農林水産省にて作成

< ウクライナ > ロシアの侵攻により、2023/24 年度の生産量は前年度比 9.3%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、ロシアによる侵攻の影響で収穫面積及び単収がいずれも減少することから、前年度より 9.3%減の 24.5 百万トンと、2012 年以来最低の水準となる見込み。なお、ウクライナ政府発表の作付け進捗データに基づき収穫面積が 0.4 百万ヘクタール上方修正され 3.8 百万ヘクタールとなったことから、生産量は前月予測から 2.5 百万トン上方修正された。

ウクライナ農業政策食料省によれば、6 月 8 日時点での 2023/24 年度の播種済面積は 4.0 百万ヘクタールで、播種はほぼ完了している。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少による供給減から、前年度より 11.3%減の 5.5 百万トンの見込み。背景には、戦争の影響で畜産物生産が減少することによる飼料用需要の減退もあるとみられている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、生産量の上方修正を受けて前月予測から 2.5 百万トン上方修正されたものの、生産量の減少及び主要輸出先である EU での増産の影響を受け、前年度より 29.6%減の 19.0 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022 年 10 月～2023 年 5 月の輸出量は 2,212 万トン（海上輸送、陸路等での全ての輸出が含まれる）。輸出先国は、中国（490 万トン）、ルーマニア（361 万トン）、スペイン（235 万トン）、イタリア（156 万トン）、エジプト（145 万トン）の順。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された 2022 年 8 月 1 日～2023 年 5 月 31 日の黒海港湾からのとうもろこし輸出量は 1,526 万トンであり、主な輸出先は、中国（480 万トン）、スペイン（275 万トン）、イタリア（140 万トン）の順。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意、ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題について、詳細は P.8 小麦－ウクライナ参照。

6 月 6 日、カホフカ水力発電所のダム決壊により、ウクライナ南部ヘルソン州の農地が浸水したが、とうもろこしの主産地は北部・中部であり、現時点で影響はほとんどないとみられる。

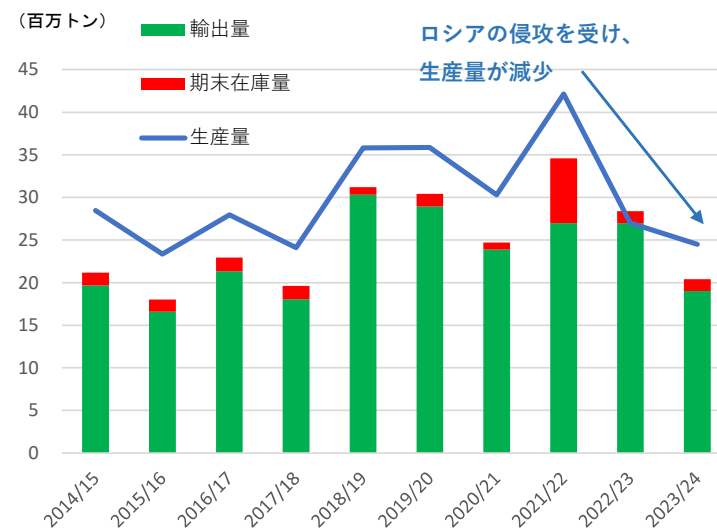
とうもろこし－ウクライナ

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	42.1	27.0	24.5	(21.0)	2.5	▲ 9.3
消 費 量	8.4	6.2	5.5	(7.6)	-	▲ 11.3
うち飼料用	7.2	5.0	4.5	(4.8)	-	▲ 10.0
輸 出 量	27.0	27.0	19.0	(15.0)	2.5	▲ 29.6
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	-	-
期末在庫量	7.6	1.4	1.4	(1.3)	-	-
期末在庫率	21.5%	4.2%	5.7%	(5.6%)	▲ 0.6	1.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.49	4.05	3.80	(3.20)	0.40	▲ 6.2
単収(t/ha)	7.68	6.67	6.45	(6.56)	▲ 0.02	▲ 3.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
IGC 「Grain Market Report」(18 May 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2023. 6. 9) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量

前年度比



前月比



- ・インド等で上方修正も、タイ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

消費量

前年度比



前月比



- ・タイ等で下方修正も、インド等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量

前年度比



前月比



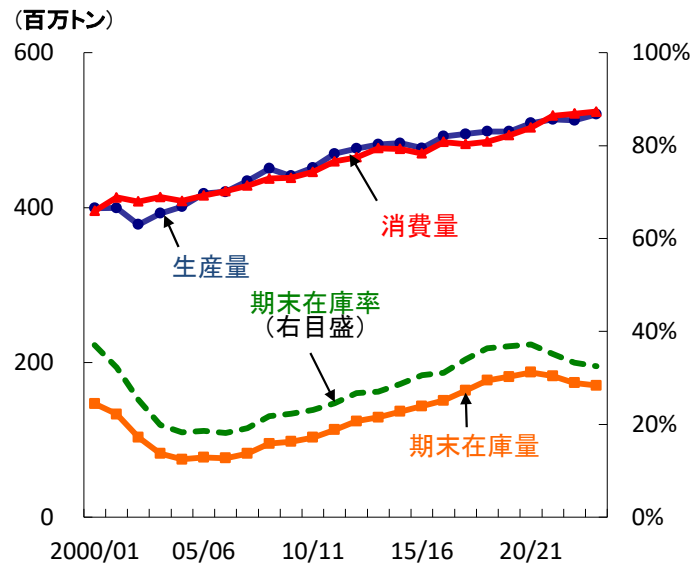
- ・タイ等で下方修正も、インド等で上方修正され、前月からの変更はなかった。

期末在庫量

前年度比



前月比



資料：USDA「PS&D」（2023. 6. 9）をもとに農林水産省にて作成

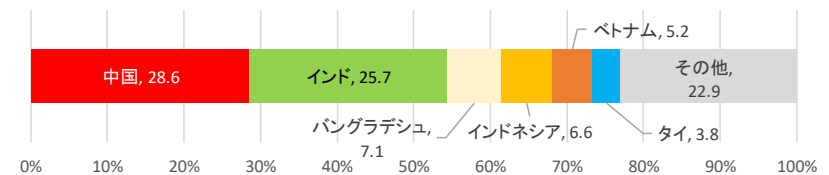
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

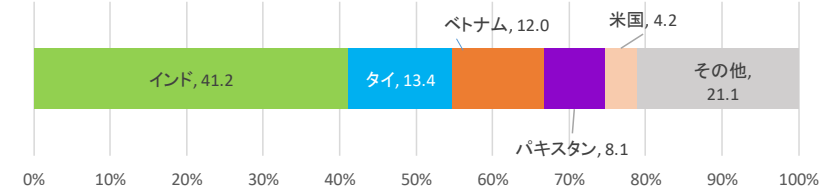
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	514.0	512.5	520.5	▲ 0.0	1.6
消 費 量	518.8	521.4	523.8	0.8	0.5
輸 出 量	56.9	55.4	55.8	—	0.7
輸 入 量	54.5	54.2	53.5	0.4	▲ 1.3
期末在庫量	182.4	173.5	170.2	3.5	▲ 1.9
期末在庫率	35.2%	33.3%	32.5%	0.6	▲ 0.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（9 June, 2023）

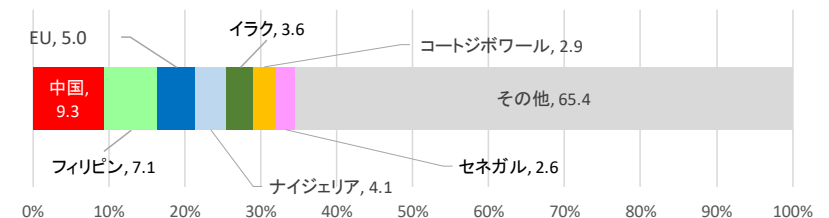
○ 2023/24年度 世界のコメの生産量(520.5百万トン)（単位：%）



○ 2023/24年度 世界のコメの輸出量(55.8百万トン)（単位：%）



○ 2023/24年度 世界のコメの輸入量(53.5百万トン)（単位：%）



（２）国別のコメの需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の作付けは終了。生産量は回復見込み

【生育・生産動向】米国農務省（USDA）によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測から変更はなく、収穫面積が長粒種、中・短粒種ともに増加（合計で前年度比 17.0%増）、単収も増加（前年度比 2.7%増）することから、前年度比 20.2%増の 6.1 百万トンとなる見込み。深刻な干ばつで 2 年連続作付面積が減少していた中、短粒種の主産地であるカリフォルニア州では、灌漑用水の供給が平年を上回る見込みであること、史上最高の価格水準等から、作付面積が飛躍的に増加する見込み（前年度比 49.1%増）。長粒種の産地でも高水準の価格等から作付面積が増加する見込み。

同「Crop Progress」（2023.6.20）によれば、主要生産 6 州の作付けは 6 月初旬までに終了した。6 月 18 日時点の発芽率は 99%と、前年同期（98%）、過去 5 年平均（97%）をやや上回っている。長粒種の主産地であるアーカンソー州では、降雨で作付けが遅れた前年度と比べ、作付けが順調だったため、100%の発芽率となった一方、播種開始時期に降雨等があり作付けが遅れたカリフォルニア州も発芽率は 95%と、前年同期（94%）、過去 5 年平均（94%）とほぼ同じ水準。主要生産 6 州の作柄評価は「良～やや良」が 70%と、前年同期（72%）をやや下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測から変更はなく、生産量の増加見通しから、前年度比 2.1%増の 4.9 百万トンと、史上最高となる見込み。背景には、増産による国内供給量増加で今後の国内取引価格の下落があると推測される。

2023/24 年度の実輸入量は、前月予測から変更はなく、生産量増加に伴う砕米及び中・短粒種の輸入減少から、前年度比 0.8%減の 1.2 百万トンの見込み。

2023/24 年度の実輸出量は、前月予測から変更はなく、生産量増加と米国産価格の低下から、前年度比 19.3%増の 2.4 百万トンの見込み。ただ長粒種は、南米産との価格競争から前年度比 6.1%増と、輸出増加は一定程度に収まる見込み。

USDA「Rice Outlook」（2023.6.13）によれば、6 月 6 日までの週のイラク向け長粒種（2 等、砕米 4 % 混入）の価格は 760 ドル/トンと、本年 1 月末以降、2008 年 10 月初旬（772 ドル/トン）以来の高値となっている（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。また中粒種（地中海向けカリフォルニア米（1 等、砕米 4 % 混入））の価格は 1,650 ドル/トンと、前年 12 月末以降で最高の価格水準となっている。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

（単位：百万精米トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年 8 月～24年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.1	5.1	6.1	-	20.2
消 費 量	4.8	4.8	4.9	-	2.1
輸 出 量	2.6	2.0	2.4	-	19.3
輸 入 量	1.2	1.3	1.2	-	▲ 0.8
期末在庫量	1.3	0.8	1.0	▲ 0.0	14.3
期末在庫率	17.0%	12.4%	13.3%	▲ 0.4	0.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.01	0.88	1.03	-	17.0
単収(もみt/ha)	8.64	8.28	8.50	-	2.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June, 2023)

写真：アーカンソー州の生育状況の風景(6月5日撮影)

生育は順調。



< インド > 2023/24 年度のモンスーンは 1 週間遅れて 6 月 8 日から開始

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、史上最高であった前年度の収穫面積から減少する（前年度比 1.5%減）と見込まれることから、前年度比 1.5%減の 134.0 百万トンとなる見込み。なお、単収が前月予測からわずかに上方修正され、史上最高だった前年度と同水準となったことから、前月予測から 1.0 百万トン上方修正された。

本年の南西モンスーンの開始は過去 4 年間で最も遅く、1 週間以上遅れ 6 月 8 日となった。北東部の産地に降雨があったものの、今後のモンスーンの状況を注視する必要がある。

インド農業農民福祉省によると、カリフ米作付済み面積は、6 月 2 日時点で 2.9 百万ヘクタールと、前年同期（3.0 百万ヘクタール）に比べ 0.1 百万ヘクタール少ない状況。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、生産量の上方修正から前月予測より 1.0 百万トン上方修正され、前年度比 1.3%増の 114.0 百万トンと史上最高の見込み。前年度に引き続き、政府の低所得世帯向け食料配給プログラム（約 8 億人が対象）向けにコメが供給される見込み（2022 年 4 月～2023 年 3 月は 65 百万トン）。

2023/24 年度の輸出量は、生産量の上方修正から前月予測より 0.5 百万トン上方修正され、依然としてタイ・ベトナム等世界の他の輸出国と比べて最も価格競争力があることから、前年度比 2.2%増の 23.0 百万トンと史上最高となり、世界第 1 位の輸出国として、世界の輸出量の 40%を占める見込み。

インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を抑制する観点から、前年 9 月 9 日に輸出規制を発動（碎米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））。

なお、IGC によると、6 月 20 日にインド政府は、2023 会計年度（2023 年 4 月～2024 年 3 月）に、インドネシア、セネガル、ガンビアに対し、入札方式による碎米輸出を許可することとした。

USDA 「Rice Outlook」（2023.6.13）によれば、インド産米（碎米 5 %混入）の 6 月 6 日までの週の輸出価格は 455 ドル/トンと、前月から 15 ドル/トン上昇したものの、アジア主要輸出国の中で依然として最低の価格水準（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

2023/24 年度の期末在庫量は、生産量の上方修正から前月予測より 3.5 百万トン上方修正されたものの、前年度比 8.6%減の 32.0 百万トンの見込み。

※国連「世界人口予測 2022」報告書（2022.7.11）によれば、2023 年 7 月 1 日時点で、インドの人口は推定 14 億 2,863 万人と、年央には中国の人口（14 億 2,567 万人）を上回り世界第 1 位となる見込み。

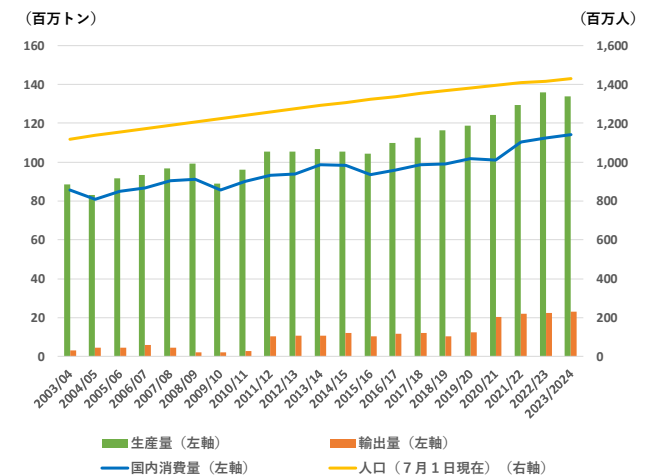
コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	129.5	136.0	134.0 (132.5)	1.0	▲ 1.5
消費量	110.5	112.5	114.0 (111.4)	1.0	1.3
輸出量	22.0	22.5	23.0 (20.7)	0.5	2.2
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	34.0	35.0	32.0 (32.4)	3.5	▲ 8.6
期末在庫率	25.7%	25.9%	23.4% (24.5%)	2.3	▲ 2.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	46.28	47.70	47.00 (45.75)	-	▲ 1.5
単収(もみt/ha)	4.20	4.28	4.28 (2.86)	0.03	-

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (9 June, 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (18 May, 2023) (単収は精米t/ha)

図：インドのコメ生産量・消費量・輸出量と人口の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2023.6.9) 及び国連「World Population Prospects 2022」をもとに農林水産省にて作成。なお 2022 年、2023 年の人口は予測値。

< 中国 > 一期作稲、及び南部の二期早稲の生育は順調

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度の干ばつから回復して収穫面積が増加し、史上最高の単収が見込まれることから、前年度比2.1%増の149.0百万トンと、史上最高となる見込み。

中国中央气象台（2023.6.12）によれば、一期作稲の生育状況は、5月末時点で、西南地域のほとんどで緑化期から分けつ期に移行している。東北地域では移植と緑化期にあり、長江中下流域では発芽して、移植と緑化期に差し掛かっている。ほとんどの地域で成長は通常通り又はやや早い状況。生育状況は良い。2023年の全国の早稲の平均収穫量は、2022年と比較して概ね横ばいの予測。また、二期早稲の生育状況は、江南地域で分けつ期から穂ばらみ期にある。華南地域はほとんどが穂ばらみ期から出穂期にある。成育はほとんどの地域で通常通り又はやや早く、生育状況も良好。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、とうもろこしの増産見込みによる飼料用米の消費量の減少から、前年度比1.9%減の152.0百万トンの見込み。

2023/24年度の輸入量は、前月予測から変更はなかったものの、2022/23年度の輸入量が予想よりも少なかったことから、下方修正されたため、前年度比4.2%増の5.0百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2023年4月の輸入量は35.6万トン（前年同期比40.3%減）、1－4月の輸入量は1.4百万トン（前年同期比39.4%減少）となった。

なお、中国はこれまで、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインド等から輸入してきたが、2022年9月以降、インドの輸出規制による価格上昇の影響等から減少している。

また、USDAによれば、2022年の年間輸入量は、コメの関税割当制度が設けられてから初めて、割当数量（5.32百万トン）を超え、6.26百万トンとなった。

中国外交部によれば、4月14日にブラジル農業畜産省と中国税関総署が、コメを含むブラジル産農産物の中国への輸出に関する衛生検疫手続の協議の促進に合意した。

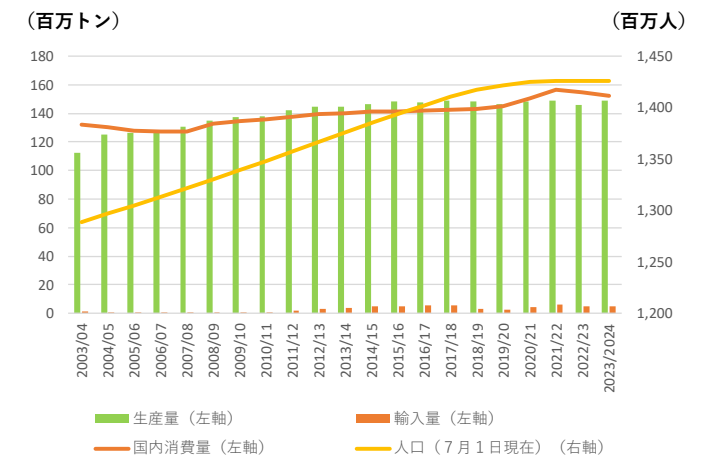
コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	149.0	146.0	149.0 (148.9)	-	2.1	
消費量	156.4	155.0	152.0 (150.4)	-	▲1.9	
輸出量	2.1	2.0	2.0 (2.2)	-	0.0	
輸入量	6.0	4.8	5.0 (4.4)	-	4.2	
期末在庫量	113.0	106.8	106.8 (105.7)	▲0.1	0.0	
期末在庫率	71.3%	68.0%	69.4% (69.3%)	▲0.1	1.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	29.92	29.45	29.85 (29.45)	-	1.4	
単収(もみt/ha)	7.11	7.08	7.13 (4.96)	-	0.7	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June, 2023)
IGC「Grain Market Report」(18 May, 2023) (単収は精米t/ha)

図： 中国のコメ生産量・消費量・輸入量と人口の推移



資料：USDA「PS&D」(2023.6.9)及び国連「World Population Prospects 2022」
をもとに農林水産省にて作成。なお2022年、2023年の人口は予測値。

< タイ > 雨季米の作付け開始。作付面積、単収いずれも減少見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、水不足や生産コスト上昇から、雨季米の収穫面積及び作期全体の単収がいずれも下方修正となることを受け、前月予測から0.8百万トン下方修正され、前年度比2.5%減の19.7百万トンの見込み。

2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、良好な天候と十分な降雨により、2021/22年度比1.5%増の20.2百万トンの見込み。

タイは5月下旬に雨季に入ったものの、6月上旬頃までは降水量が少なかった。ただ、中旬になりタイのほぼ全土で例年並みの降雨がみられたとのこと。

IGCによると、エルニーニョ現象による降雨減少予測から、2023/24年度の東南アジア全体のコメ生産が影響を受ける可能性があるとのこと。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.6）によると、2023年は例年よりも雨季の開始が遅く、雨季米は、作付け段階及び分けつ期にある。なお、農業用水不足や肥料、燃料等の資材価格の高騰により、収益性が高いキャッサバやサトウキビ等へ作付転換する農家も見込まれることから、作付面積は減少の見込み。水不足や肥料投入量の減少、病虫害発生リスクが高いため、単収も減少となると予想される。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、生産量の下方修正による供給減少から、前月予測より0.5百万トン下方修正され、対前年度比11.8%減の7.5百万トンの見込み。ただ、依然としてインドに次ぐ世界第2位のコメ輸出国となる見通し。

2022/23年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、2021/22年度比10.4%増の8.5百万トン。

タイ米輸出業者協会によれば、2023年1～4月の輸出量は、前年同期の229.1万トンから32.7万トン増加し、261.8万トンとなった。検疫問題で7年間停止していたタイ産米の輸入を2022年に再開したイラクが46.8万トン（前年同期40.1万トン）、政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大しているインドネシアは、前年同期の0.5万トンから急増して30.0万トンとなった。そのほか、南アフリカが23.9万トン（同17.3万トン）と増加しているが、米国が22.8万トン（同29.0万トン）と減少。

USDA「Rice Outlook」（2023.6.13）によれば、6月6日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、バーツ高により前月から2ドル上昇し、517ドル/トンとなった（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

コメ・タイ

夏の雨季作と冬の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年1月～24年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	19.9	20.2	19.7 (20.7)	▲ 0.8	▲ 2.5	
消 費 量	12.8	12.8	12.7 (12.4)	▲ 0.1	▲ 0.8	
輸 出 量	7.7	8.5	7.5 (8.3)	▲ 0.5	▲ 11.8	
輸 入 量	0.1	0.2	0.2 (0.3)	-	-	
期末在庫量	3.5	2.6	2.2 (6.6)	▲ 0.2	▲ 13.7	
期末在庫率	17.1%	12.0%	10.9% (32.1%)	▲ 0.7	▲ 1.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.70	10.85	10.60 (10.85)	▲ 0.30	▲ 2.3	
単収(もみt/ha)	2.81	2.82	2.82 (1.86)	▲ 0.03	-	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June, 2023)
IGC「Grain Market Report」(18 May, 2023) (単収は精米t/ha)

表：タイの国別輸出量

国名	(単位：万トン)		
	2022年 1-4月	2023年 1-4月	増減
1 イラク	40.1	46.8	6.7
2 インドネシア	0.5	30.0	29.4
3 南アフリカ	17.3	23.9	6.6
4 米国	29.0	22.8	▲ 6.2
5 中国	24.4	13.0	▲ 11.4
6 セネガル	8.2	12.1	3.9
7 日本	10.4	12.1	1.7
8 バングラデシュ	0.0	11.5	11.5
9 カメルーン	1.4	8.1	6.7
10 モザンビーク	5.7	6.6	0.9
合計	229.1	261.8	32.7

資料：タイ米輸出業者協会（2023.6）

< ベトナム > 冬春作は収穫期で単収は増加見込み。夏秋作の作付け開始

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測から変更はなく、収穫面積はわずかに減少も、単収は過去最高だった前年度の水準を維持する見込みから、前年度並みの 27.0 百万トンの見込み。長期的には肥料高騰や高収益作物等（果物・野菜・養殖）への転換等により、収穫面積は減少傾向となるとみられている。

2022/23 年度の生産量は、前月予測から変更はなく、2021/22 年度比 0.7%増の 27.0 百万トンの見込み。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.6）によると、北部では冬春作（乾季米）が収穫期にあり、収穫面積は 37.2 万ヘクタール。単収は 6.33 もみトン/ヘクタールと、十分な灌漑用水と良好な天候から、昨年度から 0.7%増加する見込み。なお、夏秋作（雨季米）の作付けが開始されたが、土壌水分が依然不足している。南部では、メコンデルタ地域で、夏秋作（雨季米）が作付け及び分げつ期にあり、現時点の作付面積は 114 万ヘクタール。例年通りの降雨量となっており、生育状況は平年並み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、前月予測から変更はなく、2023/24 年度の輸出量は、2023 年にインドネシアへの備蓄向け輸出が終了すること等から、前年度比 6.9%減の 6.7 百万トンの見込み。

なお、IGC 等によると、高品質米の輸出に重点化し、国内の食料安全保障を維持し、環境を保護しつつ気候変動に対応するため、政府は 2030 年までにコメの輸出を 4.0 百万トンにまで減らすとみられている。

2022/23 年度の輸出量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、7.2 百万トンの見込み。

ベトナム関税総局によれば、2023 年 1～5 月の輸出量は 362.0 万トンと、前年同期（276.7 万トン）に比べ 30.8%増加した。フィリピン（153.2 万トン）、中国（63.2 万トン）、インドネシア（36.9 万トン）、マレーシア（18.5 万トン）の順。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.6.9）によれば、ベトナム産米（長粒種、5% 碎米混入）の 6 月 6 日までの週の価格は、インドネシアやマレーシア等からの需要が増加したことから、前月の価格から 3 ドル/トン上昇して 503 ドル/トンと、2021 年 5 月以来の高値となった。

コメベトナム

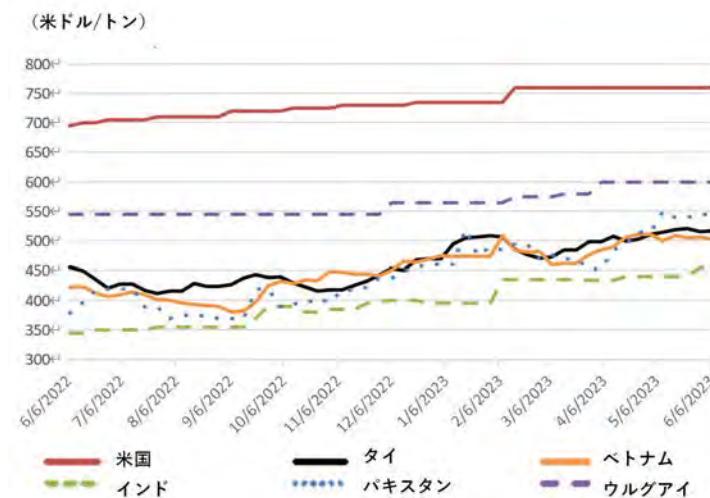
北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位: 百万精米トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年 1月～24年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	26.8	27.0	27.0 (28.1)	-	-
消 費 量	21.5	21.5	21.6 (22.2)	-	0.5
輸 出 量	7.1	7.2	6.7 (7.2)	-	▲ 6.9
輸 入 量	1.5	1.1	1.3 (1.1)	-	18.2
期末在庫量	2.4	1.8	1.8 (2.8)	▲ 0.1	-
期末在庫率	8.2%	6.1%	6.2% (9.4%)	▲ 0.4	0.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.19	7.17	7.16 (7.10)	-	▲ 0.1
単収(もみt/ha)	5.96	6.03	6.03 (3.90)	-	-

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June, 2023)
IGC「Grain Market Report」(18 May, 2023) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料: USDA「Grain: World Markets and Trade」(2023.6.9)より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・EU で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

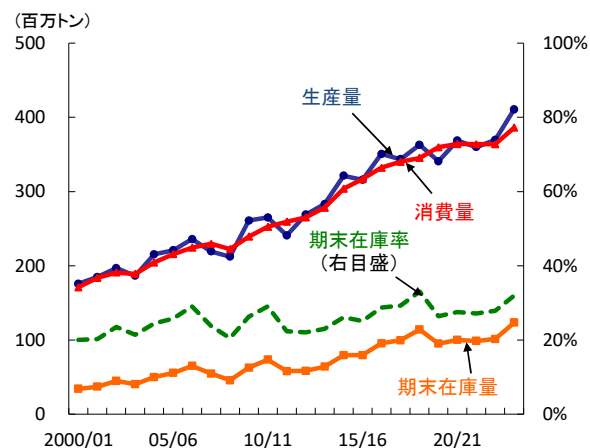
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・アルゼンチンで下方修正され、前月から下方修正された。前年度を上回り、史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 —

・前月予測からの変更はなく、前年度を上回り、史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」(2023.6.9)をもとに農林水産省で作成

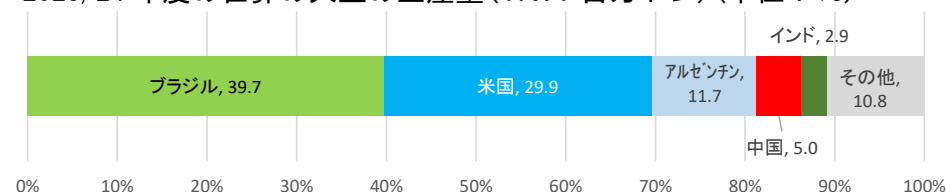
◎ 世界の大豆需給

(単位：百万トン)

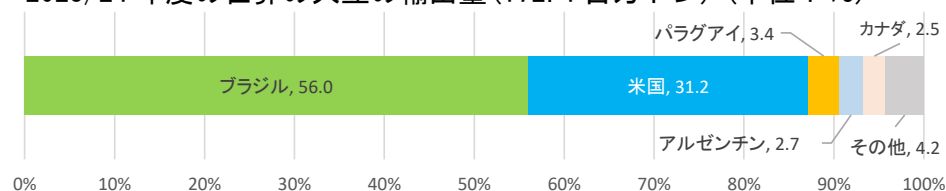
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	359.9	369.6	410.7	0.1	11.1
消費量	363.8	363.8	386.1	▲ 0.4	6.1
うち搾油用	314.2	312.2	331.9	▲ 0.4	6.3
輸出量	154.0	168.5	172.4	—	2.3
輸入量	156.6	165.3	169.8	0.0	2.7
期末在庫量	98.7	101.3	123.3	0.8	21.7
期末在庫率	27.1%	27.8%	31.9%	0.3	4.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 June 2023)

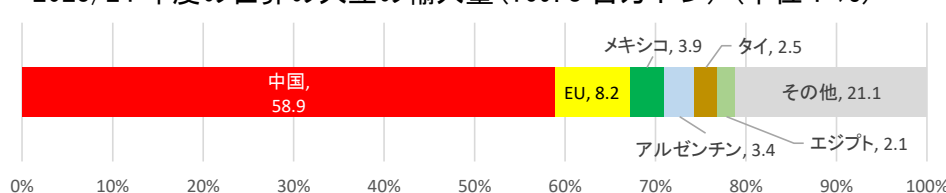
○ 2023/24 年度の世界の大豆の生産量 (410.7 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸出量 (172.4 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸入量 (169.8 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 中西部の乾燥の影響で、作柄評価は前年同時期を下回る

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加等により前年度より5.5%増の122.7百万トンの見通し。

USDA「Crop Progress」（2023.6.20）によれば、作付けは6月18日現在で概ね終了し、発芽率は92%と、前年同時期（81%）、過去5年平均（81%）を上回っている。作柄評価が「良～やや良」の比率は54%と、6月中旬の乾燥の影響で前週（59%）から引き下げられ、前年同時期（68%）を下回っている。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、バイオ燃料・飼料用需要増による搾油の収益改善の見通しから、前年度より4.1%増の66.3百万トンで史上最高の見込み。なお、背景としては、環境志向に伴い、バイオ燃料向けの搾油工場の新設による需要増が見込まれていることがあるとみられる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量が増加し価格の低下が見込まれるものの、史上最高の豊作見通しとなったブラジル産と比べ相対的な価格競争力が落ちていることから、前年度より1.2%減の53.8百万トンの見込み。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、生産量が増加し、南米産との競争により輸出量が減少することから、前年度より51.8%増の9.5百万トンとなる見込み。なお、低調な輸出ペースから2022/23年の輸出量が下方修正されたため、前月予測から0.4百万トン上方修正された。結果として期末在庫率は7.9%で、過去4年で最も高い水準となる見込み。

USDAによれば、2023年輸出量（2023年1月1日～5月25日）は、19.1百万トンと、前年度同時期（18.9百万トン）を上回っている。内訳は中国（11.0百万トン）、メキシコ（1.8百万トン）、ドイツ（1.3百万トン）の順。

なお、米国の輸出価格は、前年12月以降、ブラジル産に比べ割高で推移しており、2月以降、ブラジル産の収穫期を迎え更に価格差が広がった（上図参照）。

大豆－米国

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年9月～24年8月）		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	121.5	116.4	122.7	－	5.5
消費量	62.8	63.7	66.3	－	4.1
うち搾油用	60.0	60.4	62.9	－	4.1
輸出量	58.7	54.4	53.8	－	▲ 1.2
輸入量	0.4	0.5	0.5	－	－
期末在庫量	7.5	6.3	9.5	0.4	51.8
期末在庫率	6.1%	5.3%	7.9%	0.3	2.6
（参考）					
収穫面積(百万ha)	34.93	34.94	35.09	－	0.4
単収(t/ha)	3.48	3.33	3.50	－	5.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（9 June 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 2022/23 年度の収穫はほぼ完了し、生産量は史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降作付けが開始される 2023/24 年度
の生産量は、前月予測からの変更はなく、作付面積が史上最大となる見通しから、前年
度より 4.5%増の 163.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2023.6.13）によれば、2022/23 年度の
収穫進捗率は 99%とほぼ完了し、生産量は、収穫面積が上方修正されたことから、0.9
百万トン上方修正され 155.7 百万トンの見通し。USDA によれば、天候に恵まれたこ
とに加え、種子の品種改良や栽培方法の改善により、生産量は大幅に増加した。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、
飼料として使用される大豆粕向けの搾油用需要が増加することから、前年度より 4.2%
増の 59.7 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更
はなく、2 年連続で生産量が史上最高を更新し、価格競争力が高まる見込みから、前年
度より 3.8%増の 96.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1 月～5 月の輸出量は 49.0 百万ト
ンで、前年同期（43.0 百万トン）に比べ 14.0%増となっている。輸出先の
内訳は、1 位が中国（34.4 百万トン）、2 位がアルゼンチン（1.9 百万ト
ン）、3 位がスペイン（1.7 百万トン）の順となっている。堅調な中国向け
輸出に加え、干ばつにより減産したアルゼンチンへの搾油用需要を満たす
ための輸出が大幅に増加した。

「OIL WORLD Monthly」（2023.5.19）によれば、5 月に入り農家の大
豆出荷の最盛期が終わったことから、輸出港の貯蔵キャパシティに余裕が
出てきた。なお、今後、史上最高の生産量が見込まれる冬とうもろこしの収
穫が本格化し、農家が販売を増加させる可能性もあるため、今後の輸出港の
貯蔵キャパシティに引き続き注視が必要である。

大豆－ブラジル

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	130.5	156.0	163.0 (159.0)	－	4.5	
消 費 量	54.0	57.3	59.7 (59.3)	－	4.2	
うち搾油用	50.7	53.5	55.8 (56.0)	－	4.2	
輸 出 量	79.1	93.0	96.5 (97.8)	－	3.8	
輸 入 量	0.5	0.3	0.5 (0.5)	－	80.0	
期末在庫量	27.6	33.6	40.8 (9.2)	0.4	21.6	
期末在庫率	20.7%	22.3%	26.1% (5.8%)	0.3	3.8	

(参考)

収穫面積(百万ha)	41.60	43.90	45.60 (44.75)	－	3.9
単収(t/ha)	3.14	3.55	3.57 (3.55)	－	0.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
IGC「Grain Market Report」(18 May 2023)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の大豆の作付けは、2022年9月以降、順次開始。
2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等						作付 4.4(百万ha)						収穫 27.1(百万t)						→ 収穫夏冬作計 125.7百万t		
冬とうもろこし	作付面積夏冬作計 22.2百万ha												作付 17.7(百万ha)			収穫 98.6(百万t)					
大豆	マツト・グロッソ州、パラナ州等						作付 44.0(百万ha)						↑ 大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし作付け			収穫 155.7(百万t)					

資料：CONAB穀物レポート（2023.6.13）

< アルゼンチン > 2022/23 年度の輸入量は、減産により史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 11 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥の影響を大きく受けた前年度より 92.0%増の 48.0 百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.6.15）によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、21.0 百万トン（過去 5 年平均（45.0 百万トン）より 53%減）と低水準となる見通し。収穫進捗率は 98.1%と、収穫はほぼ完了。

現地情報によると、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形の発行、各種税の支払い猶予措置などの救済施策を発表した。また、外貨獲得のため、4 月 10 日から 5 月 31 日までの間の 45 日間を超えない範囲で、大豆優遇為替レート（1 ドル＝300 ペソ）を適用した。

USDA によれば、優遇為替レートにより農家の販売意欲が高まったこと等から、輸出量が増加した。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、増産に伴い搾油量が回復することから前年度より 17.8%増の 42.7 百万トンの見込み。なお、2022/23 年度の実輸出量の増加に伴い、2023/24 年度の国内への供給が予想よりタイトとなる見通しから、前月予測から 0.5 百万トン下方修正された。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内生産量の増加に伴い輸入需要に乏しく、前年度より 31.3%減の 5.7 百万トンの見込み。2022/23 年度の実輸入量は、国内生産が減少したことを受け、搾油用需要を満たすためにブラジル産及びパラグアイ産の輸入が急増したため、8.7 百万トンで史上最高の見込み。

2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、干ばつにより減産し価格競争力が弱まった前年度から生産量が回復する見込みから、前年度より 21.1%増の 4.6 百万トンの見込み。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2%引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻している。

大豆ーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	43.9	25.0	48.0 (44.0)	-	92.0	
消 費 量	46.0	36.3	42.7 (42.8)	▲ 0.5	17.8	
うち搾油用	38.8	30.0	36.0 (39.0)	▲ 0.5	20.0	
輸 出 量	2.9	3.8	4.6 (4.8)	-	21.1	
輸 入 量	3.8	8.7	5.7 (5.5)	-	▲ 34.5	
期末在庫量	23.9	17.6	24.0 (3.6)	▲ 0.1	36.5	
期末在庫率	48.9%	43.8%	50.6% (7.6%)	0.3	6.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	15.90	15.00	16.40 (16.10)	-	9.3	
単収(t/ha)	2.76	1.67	2.93 (2.73)	-	75.4	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
IGC「Grain Market Report」(18 May 2023)

写真：北部サンタフェ州の早植え大豆の圃場風景 （6月4日撮影）

本圃場は、干ばつによる高温・乾燥の影響を受けたため、
予想単収は低く、約 1 トン/ヘクタールが見込まれている。



＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高、輸入量増加の見通し

【生産・生育状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収が減少するものの、収穫面積が増加することから、全体として前年度より 1.1%増の 20.5 百万トンで史上最高の見込み。

2 月 13 日に公表された中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央 1 号文件には、引き続き大豆の作付け拡大の取組等について記載された。

なお、5 月末現在、主産地の東北地区の黒竜江省等では播種が終了し、発芽期を迎えている。当初降雨は少なかったが、6 月上旬に降雨に恵まれ、概ね順調に生育しているとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、国内の大豆粕需要と食料需要が増加することにより、前年度より 4.7%増の 118.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の搾油需要の増加から前年度より 2.0%増の 100.0 百万トンの見込み。

農業農村部によれば、2023 年 1 月～4 月計の輸入量は、前年同期より 6.8%増の 3,029 万トン。内訳は、米国（1,823.8 万トン）、ブラジル（921.0 万トン）、アルゼンチン（142.9 万トン）の順。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 4 月号」によれば、4 月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、前月（5,400 元/トン）から下落し、5,260 元/トンとなった。一方、4 月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（6,040 元/トン）から下落し、5,920 元/トンとなった。農家の売却意欲が高いものの、国産の需要が低調で推移しているが、これは、国産大豆が輸入大豆より割高であることが要因とみられる。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 6.7%増の 38.2 百万トンで史上最高の見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前月予測からの変更はなく、前年度から 0.6 ポイント増加し、32.3%となる見込み。

大豆－中国

(単位：百万トン)						
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	16.4	20.3	20.5 (21.5)	-	1.1	
消 費 量	108.4	112.7	118.0 (117.8)	-	4.7	
うち搾油用	87.9	91.0	95.0 (97.9)	-	4.4	
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-	
輸 入 量	91.6	98.0	100.0 (98.9)	-	2.0	
期末在庫量	30.3	35.8	38.2 (33.0)	-	6.7	
期末在庫率	27.9%	31.7%	32.3% (28.0%)	-	0.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	8.42	10.24	10.45 (10.44)	-	2.1	
単収(t/ha)	1.95	1.98	1.96 (2.06)	-	▲ 1.0	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 June 2023)
IGC「Grain Market Report」(18 May 2023)

表：中国の大豆輸入量と輸入先国

2023年4月			2023年 1 月～2023年 4 月			2022年 1 月～2022年 4 月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	530.0	73.0	米国	1823.8	60.2	米国	1503.6	53.0
米国	182.4	25.1	ブラジル	921.0	30.4	ブラジル	1267.2	44.7
ロシア	10.6	1.5	アルゼンチン	142.9	4.7	カナダ	21.0	0.7
エチオピア	1.1	0.2	カナダ	91.9	3.0	ロシア	17.5	0.6
ベナン	0.7	0.1	ロシア	39.4	1.3	アルゼンチン	12.3	0.4
カナダ	0.7	0.1	ウクライナ	3.9	0.1	ベナン	10.0	0.4
その他	0.8	0.1	その他	5.7	0.2	その他	4.2	0.1
計	726.3	100	計	3028.6	100	計	2835.8	100

資料：農業農村部資料より農林水産省にて作成

＜ カナダ ＞ 主産地のオンタリオ州での播種は終盤

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2023.6.20）によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、平年並みの天候に恵まれれば単収は 3.01 トン/ヘクタールとなり、高単収の前年度より低下するものの、収穫面積が増加することから、全体として前年度から 2.4%増の 6.7 百万トンの見込み。

カナダの大豆生産は、小麦やなたねと異なり、東部のオンタリオ州が主産地で、生産量の半分以上のシェアがある。オンタリオ州に隣接するマニトバ州、ケベック州でも生産されている。オンタリオ州穀物報告（2023.6.1）によれば、主産地のオンタリオ州では大豆の播種は終盤を迎えている。

AAFC によれば、主産地のカナダ東部では、気温は平年並みに近く、土壌水分は平年並み。ただし、ケベック州の一部、マニトバ州では土壌水分が少ない状況にある。

カナダでは、5 月後半から 6 月前半にかけて乾燥傾向となっており、乾燥の影響を受けて山火事が発生したが、現在のところ乾燥による生産量への影響は報告されていない。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度並みの 2.6 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 2.2%減の 4.4 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2022/23 年度（2022 年 8 月～2023 年 7 月）のうち、2022 年 8 月～2023 年 4 月の輸出量は 306.5 万トンで、前年度同時期（262.7 万トン）を上回っている。国別では、中国向け（128.8 万トン）が 42%を占め、続いて、イラン（44.8 万トン）、アルジェリア（36.5 万トン）、イタリア（25.1 万トン）の順となっている。2023 年 4 月の輸出量は 9.2 万トンで、全量がアイルランド向けである。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度並みの 0.5 百万トンの見込みであり、期末在庫率は、前月予測からの変更はなく、前年度より 0.5 ポイント増の 6.9%の見込み。

大豆－カナダ

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.2	6.5	6.5 (6.7)	-	▲ 0.7
消費量	2.3	2.6	2.6 (2.5)	-	-
うち搾油用	1.8	2.0	2.0 (1.9)	-	-
輸出量	4.3	4.5	4.4 (4.7)	-	▲ 2.2
輸入量	0.5	0.6	0.5 (0.5)	-	▲ 9.1
期末在庫量	0.4	0.5	0.5 (0.4)	-	6.7
期末在庫率	6.5%	6.4%	6.9% (4.9%)	-	0.5

(参考)

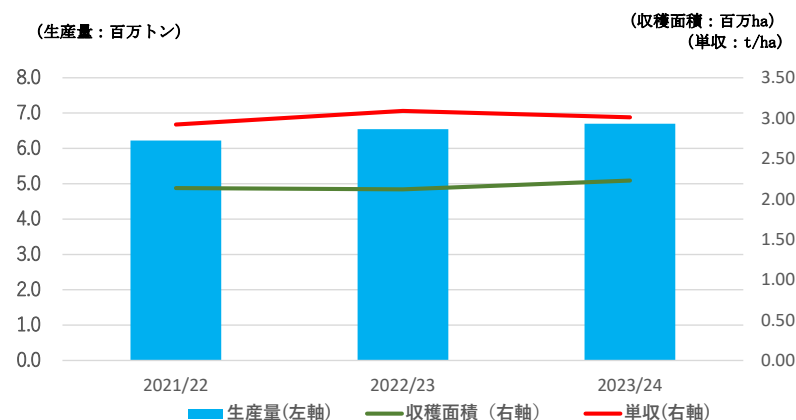
収穫面積(百万ha)	2.08	2.12	2.20 (2.23)	-	3.8
単収(t/ha)	2.99	3.09	2.95 (3.01)	-	▲ 4.5

資料：USDA 「PS&D」

「World Agricultural Production」 (9 June 2023)

AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」 (20 June 2023)

図：カナダの直近 3 か年の生産量等の推移



資料：AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」 (2023.6.20) をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2023/24年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	23年6月～24年5月	23年9月～24年8月	23年8月～24年7月	23年9月～24年8月
カナダ	23年8月～24年7月			23年8月～24年7月
豪州	23年10月～24年9月		24年3月～25年2月	
EU	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
中国	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月
ロシア	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		23年9月～24年8月
ウクライナ	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
ブラジル		24年3月～25年2月	24年4月～25年3月	23年10月～24年9月
アルゼンチン	23年12月～24年11月	24年3月～25年2月		23年10月～24年9月
タイ			24年1月～12月	
インド	23年4月～24年3月		23年10月～24年9月	
ベトナム			24年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2023/24年度は、米国の小麦では2023年6月～2024年5月、ブラジルのとうもろこしでは2024年3月～2025年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

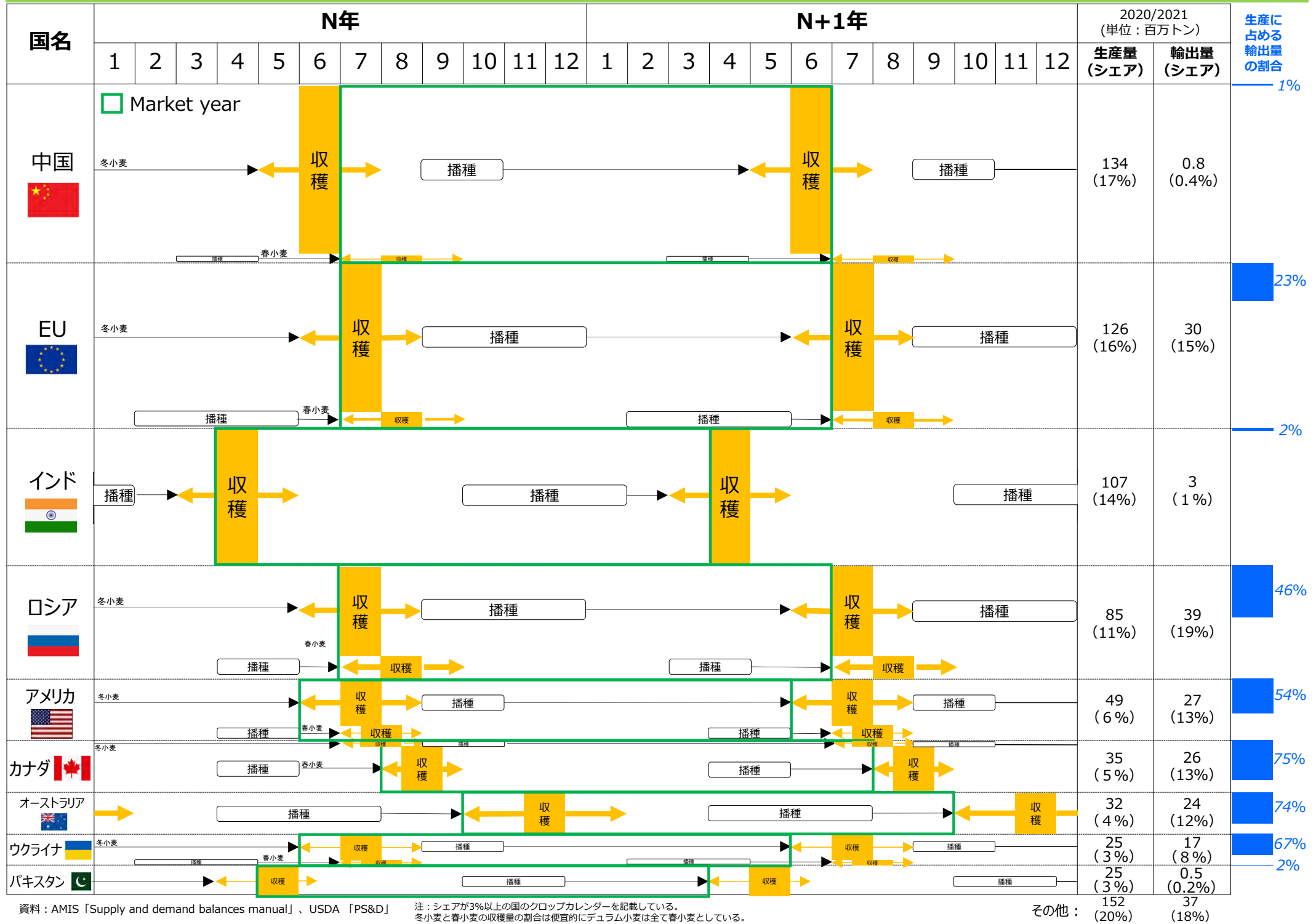
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏：℃＝(° F－32)÷1.8			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



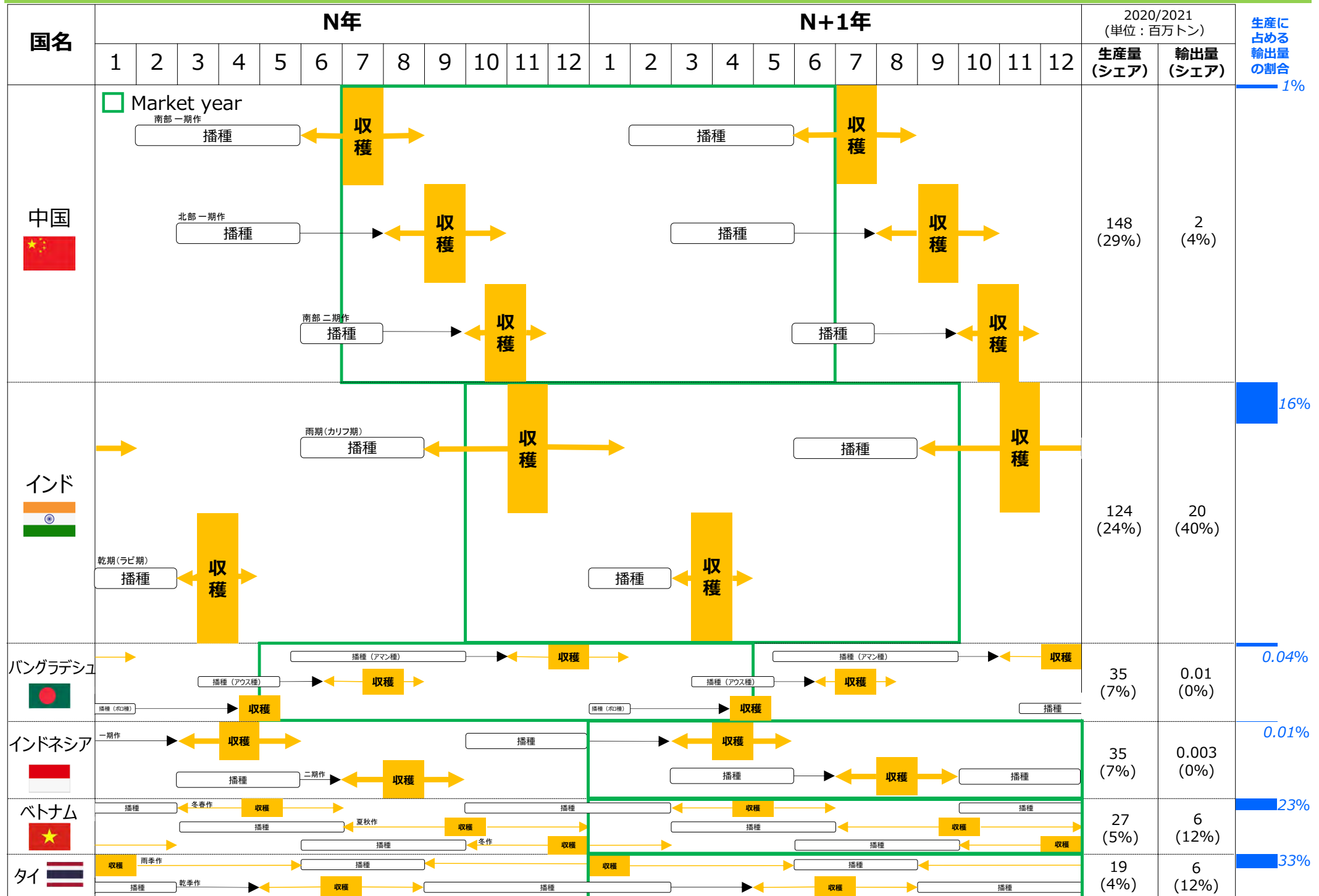
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。
冬小麦と春小麦の収穫量の割合は便宜的にデュラム小麦は全て春小麦としている。

その他：

主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

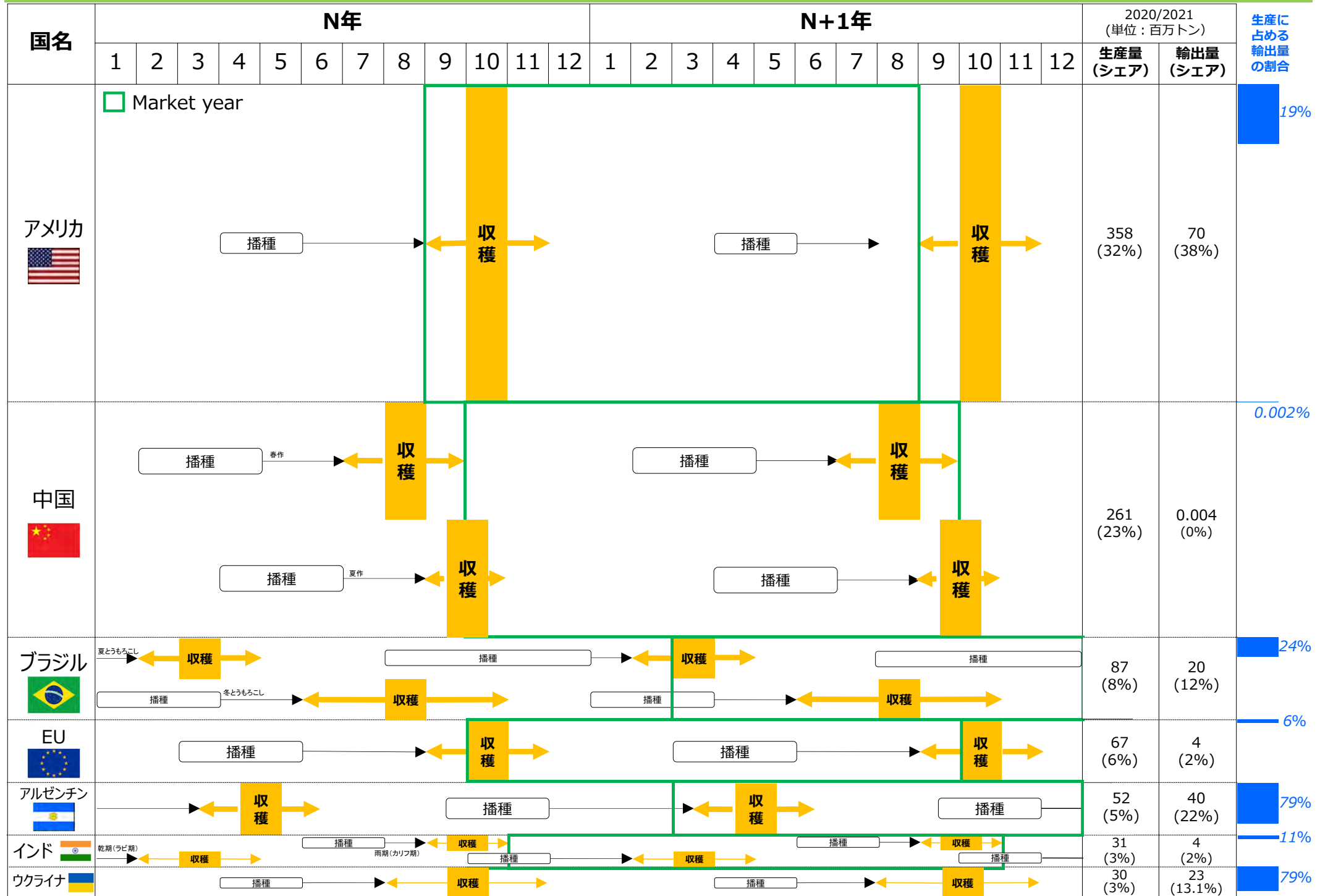
その他：

121
(24%)

16
(32%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



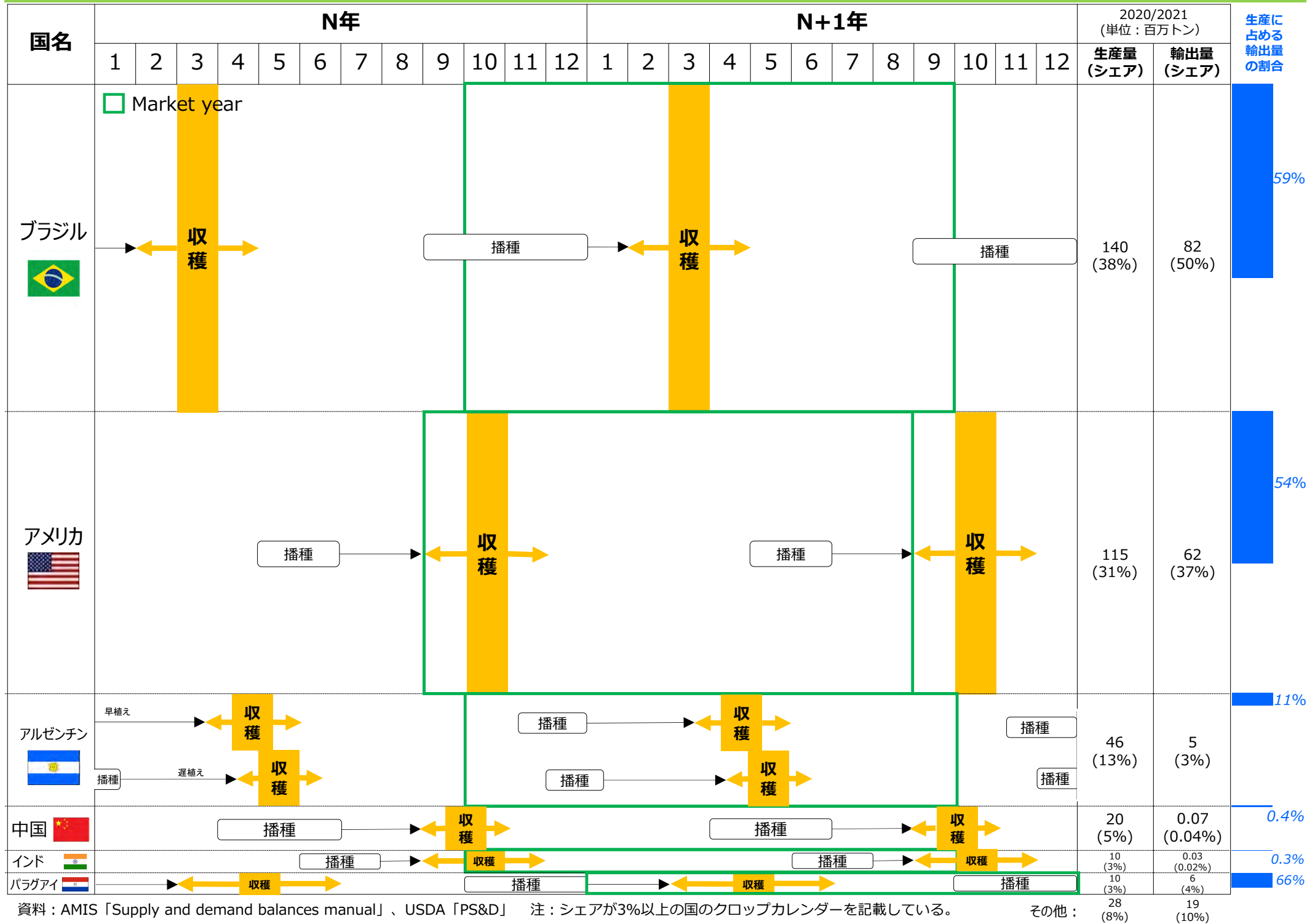
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他：242 (19%) 21 (11%)

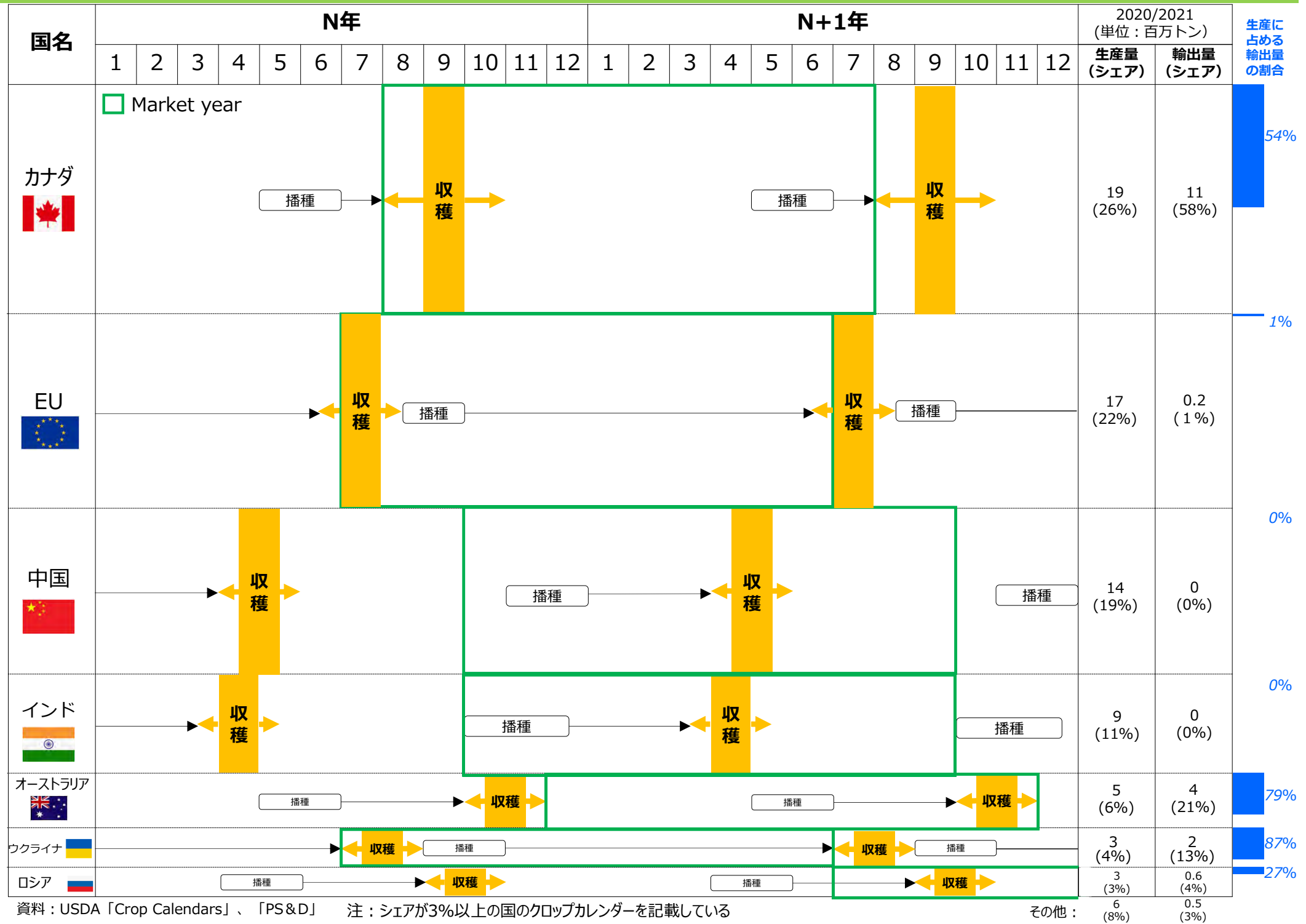
主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2023 年 6 月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2023/24 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 月報で一番関心／参考にしている項目のうち、特別分析トピックを選択された場合、特に関心があったテーマがあれば教えてください。
- 7 最近で最も興味を引いた／役立った記事は何ですか。（自由記載）
- 8 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
中国の需要・輸入動向
- 9 特別分析トピックで取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
- 10 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）



ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html